

いわき明星大学

「学修行動調査 2015」調査報告書

学修行動調査 W.G.

角田 大
安齋孝幸
泉田 浩
遠藤拓哉
大橋 壮
信田重成

目次

第1章 回答者の属性

- 1.0 学修行動調査について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 1.1 片道の通学時間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 1.2 居住形態・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 1.3 浪人経験の有無・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 1.4 第1志望校への入学の有無・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 1.5 高校時代の成績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 1.6 高校時代の学修経験・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第2章 大学における学びの状況

- 2.1 授業をつうじた学修経験・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 2.2 授業内外における学修行動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- 2.3 正課内活動や正課外活動に費やす時間・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
- 2.4 大学入学後の知識・能力の変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

第3章 学びや大学生活に関する意識

- 3.1 大学生活への適応感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
- 3.2 大学の教育内容に対する満足感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
- 3.3 大学の教育環境に対する満足感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
- 3.4 学生生活の充実度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
- 3.5 学部卒業後の予定進路・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

第4章 英語の学修状況

- 4.1 英語と接する機会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
- 4.2 英語運用能力の熟達度レベル分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
- 4.3 C E F R尺度に基づく英語運用能力の熟達度レベル・・・・・・・・ 18
- 4.4 英語に対する意識・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

第5章 付録（学部別集計結果）

- 5.1 高校時代の学習経験・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
- 5.2 大学における学びの状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
 - 5.2.1 授業をつうじた学修経験・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
 - 5.2.2 授業内外における学修行動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
 - 5.2.3 正課内活動や正課外活動に費やす時間・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
 - 5.2.4 大学入学後の知識・能力の変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
- 5.3 学びや大学生活に関する意識・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
 - 5.3.1 大学生活への適応感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
 - 5.3.2 大学の教育内容に対する満足感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
 - 5.3.3 大学の教育環境に対する満足感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

第1章 回答者の属性

1.0 学修行動調査について

学修行動調査 W.G. が行った学修行動調査は、「本学学生の実態の把握、現状分析を行うことで、学生が何を求めているかを探り、学生生活をより充実・向上させること。あわせて個々の学生の状況を把握し、学修指導にいかすこと。」を目的としている。

調査対象 : 本学全学生 (学部生・大学院生)

回答方法 : manab@を利用

実施期間 : 平成 27 年 7 月 10 日～9 月 24 日

平均回答率 : 60%

1.1 片道の通学時間

現在の住まいから大学までの片道の通学時間の回答分布を示したものが、表 1.1 である。片道の通学時間が 1 時間未満の学生は全体の 84.0%と大半を占めていることがわかる。詳しくみていくと、「30 分未満」の学生が 57.6%と最も多い。「30 分～1 時間未満」が 26.4%、「1 時間以上～1 時間 30 分未満」が 9.4%、「1 時間 30 分以上～2 時間未満」が 4.6%である。片道「2 時間以上」かけて通学してくる学生も 2%いる。

表 1.1 片道の通学時間の分布

片道の通学時間	回答割合
30分未満	57.6%
30分以上～1時間未満	26.4%
1時間以上～1時間30分未満	9.4%
1時間30分以上～2時間未満	4.6%
2時間以上	2.0%
合計	100.0%

1.2 居住形態

居住形態の回答分布については、「家族または親戚と暮らしている」学生が 62.2%を占め、「アパート・学生マンションでひとり暮らしをしている」学生は 36.9%、「大学寮や合宿所」で暮らしている者はわずかであった (0.9%)。

表 1.2 居住形態の分布

居住形態	回答割合
家族または親戚と暮らしている	62.2%
アパート・学生マンションでひとり暮らし	36.9%
大学寮や合宿所	0.9%
合計	100.0%

1.3 浪人経験の有無

大学入学以前の経験について確認すると(表 1.3)、浪人経験をもつ学生の割合は4%であるのに対して、現役で大学に進学した者は88%である。留学生や社会人などは8%であった。

表 1.3 浪人経験の有無

大学入学前の浪人の有無	回答割合
現役	88%
浪人	4%
その他(留学生、社会人など)	8%
合計	100%

1.4 第1志望校への入学の有無

本調査に回答した学生にとって、本学が第1志望校だったのかどうかを表 1.4 に示す。回答はほぼ半々に分かれた。56%の学生が、本学が第1志望校だったと回答しているのに対して、44%が第1志望ではなかったと回答している。

表 1.4 第1志望校への入学の有無

入学した大学	回答割合
第1志望だった	56%
第1志望ではなかった	44%
合計	100%

1.5 高校時代の成績

学生本人の自己申告による、高校時代の成績の相対的な位置をみていく。表 1.5 に「あなたの高校での成績はどのあたりでしたか」という質問に対する回答を示す。全体の27%が「中くらい」、21%が「中の上くらい」、15%が「中の下くらい」と答えている。半数以上の学生が、高校時代の成績は平均的だったと自己評価していることがわかる。また20%が「上位の方」と回答しており、「下位の方」と回答した学生は12%であった。なかには「その他(わからない、覚えていない、など)」と答えた学生もいるが、その割合は6%であった。

表 1.5 自己申告による高校時代の成績

高校時代の成績	回答割合
上位の方	20%
中の上くらい	21%
中くらい	27%
中の下くらい	15%
下位の方	12%
その他(わからない、覚えていないなど)	6%
合計	100%

1.6 高校時代の学修経験

大学教育の効果や成果は、大学入学以前からの資質、学修経験によって影響を受けることから、学生たちが高校時代にどのような学修経験をしてきたのかも調べておく。図 1.6 に「あなたは高校3年生だった時、次のことがらをどの程度しましたか」に対する回答を示した。「ひんぱんにあった」あるいは「ときどきあった」と回答した学生の割合の合計に注目して回答傾向をみていくと、「自分の失敗から学んだ」学生は77%にもものぼる。

「授業以外に興味のあることを自分で勉強した」(55.2%)、「インターネット上の情報が事実かどうか確認した」(50.0%)、「問題に対処するために新しい解決策を求めた」(48.7%)、「問題の解決方法を模索し、それを他者に説明した」(46.7%)、「困難なことにあえて挑戦した」(42.7%)、「自分が取り組んだ課題について教師に意見を求めた」(42.4%)といったことを高い頻度で経験した学生は、ほぼ半数である。

一方、「授業中、質問した」、「自分の意見を論理的に主張した」、「自発的に作文の練習をした」、「科学的研究の記事や論文を読んだ」経験については、70%から80%の学生が「あまりしなかった」「まったくなかった」と回答している。高校時代に、自発的な発言や論理的な文章を読んだり書いたりあるいは主張したりするトレーニングをしたことのある学生は、決して多くないようである。

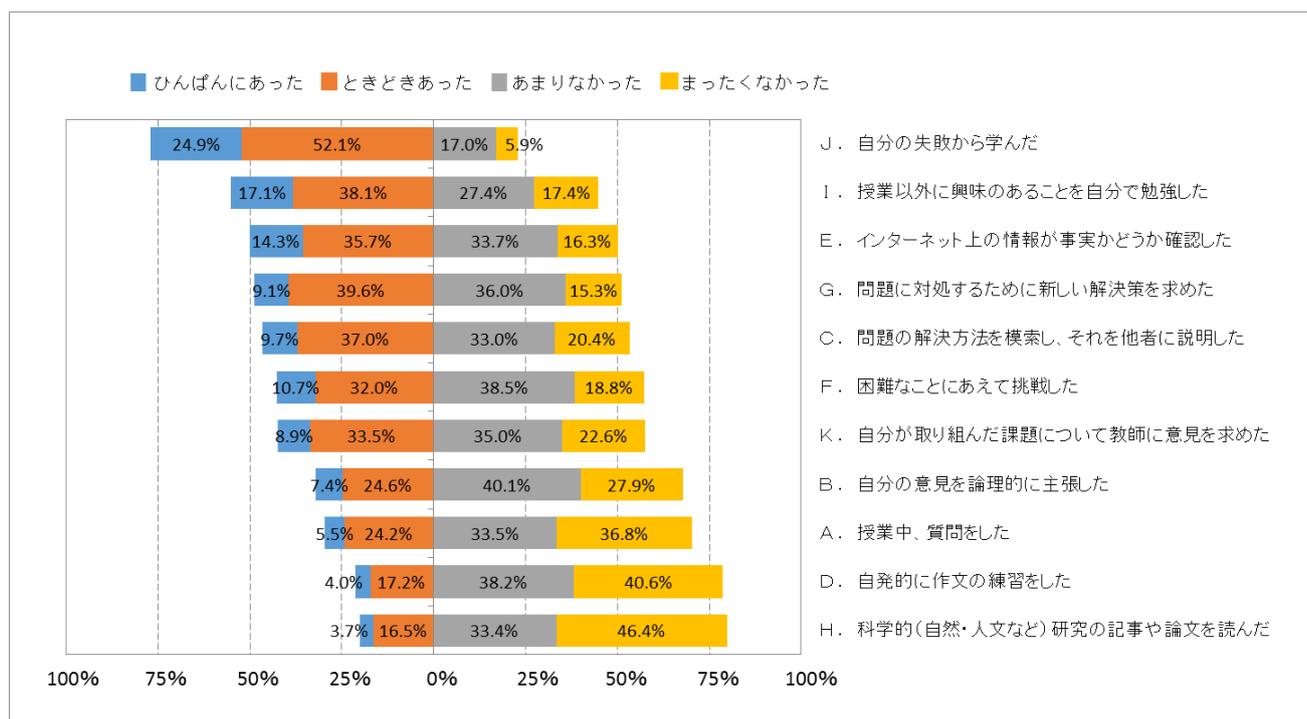


図 1.6 高校時代の学修経験

第2章 大学における学びの状況

本章では、大学のなかでの全般的な学びの状況について明らかにする。第一に、大学の授業をつうじた学生たちの学修体験の頻度を手がかりに、大学が学生に提供した教育方法を調べる。第二に、授業内外における学生たちの学修行動や受講態度に基づいて、学生の学修への取り組み方を確認する。第三に、学生たちが正課内活動や正課外活動に費やす時間から、大学生生活に占める学修の比重を探る。最後に、入学後の能力や知識の変化をとおして、大学教育の成果について検討する。

2.1 授業をつうじた学修経験

各種の授業経験の頻度を尋ねた質問項目とそれらに対する回答を図 2.1 に示す。「定期的に小テストやレポートが課される」ことに対し、「ひんぱんにあった」あるいは「ときどきあった」と答えた学生は合わせて 93%にもものぼる。ほとんどの学生が、授業を通じて小テストやレポートに取り組んだ経験をもっている。学期末・学年末試験の直前だけでなく、講義期間中から準備学修や事後学修を習慣づけるような授業方法が採用されていることがよみとれる。しかしながら、教員から「提出物に添削やコメントをつけて返却」されたことのある学生は 60%であり、約 40%の学生は提出物をとおして自身が自身の学修状況を振り返る機会を得ていない。

授業のなかでは、定期的に小テストやレポートが出題されるとともに、「出席することが重視される」(88.7%)ことも多い。授業に出席して講義を聞くだけでなく、「学生自身が文献や資料を調べる」(79.6%)、「学生が自分の考えや研究を発表する」(75.2%)、「授業中に学生同士が議論をする」(75.6%)など、学生の自主的な学修参加を促すような授業形式も比較的多い。また、「実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ」機会があった学生も約 70%と多い。

このようなアクティブ・ラーニング型の授業では、双方向型の学修が展開されることになる。その補助や授業外学修の支援を担う「TA・SA（上級生や大学院生の授業補助者）から補助を受けた」ことのある学生は約 50%であった。だが、本学の教育プログラムのなかで実践的な社会体験の機会は多くなく、「授業の一環でボランティア活動」を経験した学生は約 10%であった。

これらの授業経験をつうじて、多くの学生たちが「授業内容と社会や日常生活のかかわりについて、教員が説明する」(73.9%)や、「仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ」(80.1%)などの機会があったと感じている。

また、「授業の進め方に学生の意見が取り入れられる」(45.2%)機会や「授業で検討するテーマを学生が設定する」(37.6%)機会はあまり多くなく、教員主導の授業運営が多いことがよみとれる。

授業方法に直接的には関連しないが、「取りたい授業を履修登録できなかった」学生は約 30%となっている。

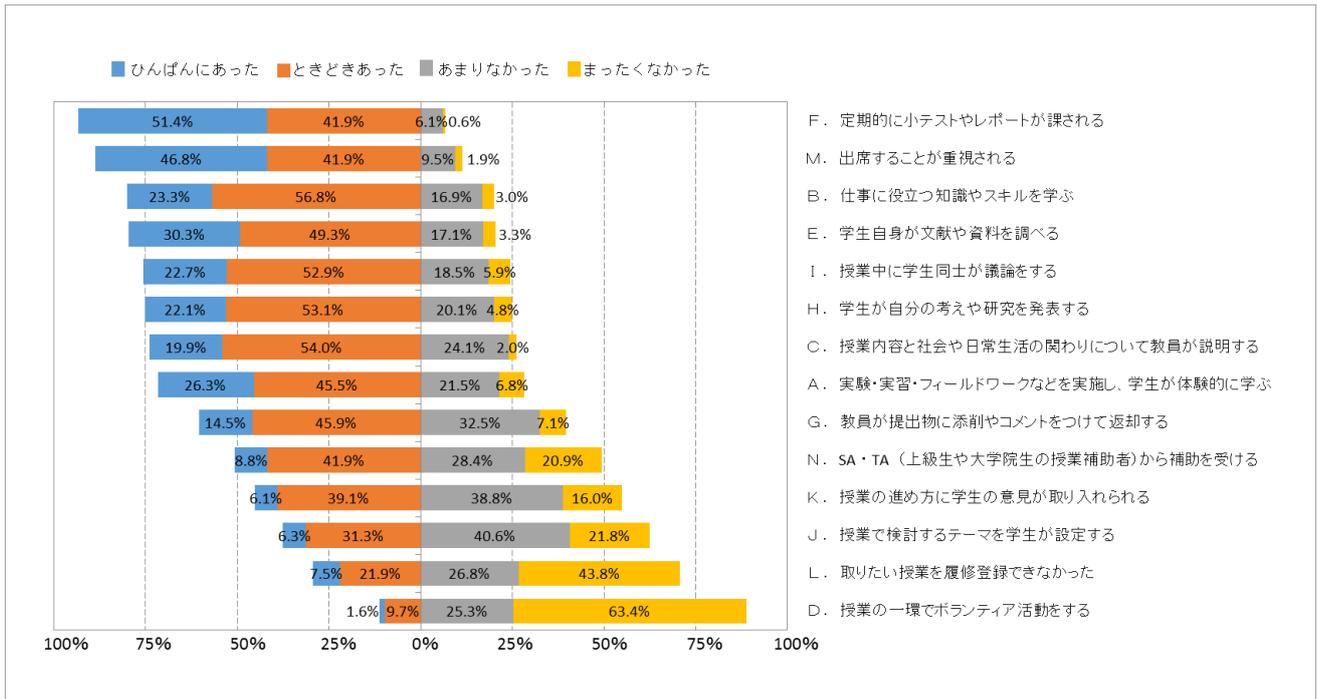


図 2.1 授業をつうじた学修経験

2.2 授業内外における学修行動

大学から提供されるさまざまな教育プログラムに対して、学生たちはどのような姿勢で取り組んでいるのだろうか。図 2.2 は、受講態度や授業内外での学修行動に関する質問項目に対する回答を示したものである。「ひんぱんにした」あるいは、「ときどきした」と答えた学生の割合の合計に注目してみよう。「授業課題のために Web 上の情報を利用した」ことのある学生は約 90%、「インターネットを使って授業課題を受けたり、提出したりした」ことのある学生も約 80%いる。それに対して、「授業課題のために図書館の資料を利用した」学生は 66%である。学生たちは、図書館に足を運ぶよりも、インターネットを使って文献や資料を集めたり調べたりすることのほうが多い。現在の大学生にとって、インターネットは授業課題に取り組む際の重要なツールになっていることがよみとれる。また、「提出期限までに課題を完成できなかった」学生は 30%程度にとどまっており、約 70%の学生が期限までに課題を仕上げ提出している。

出席重視の授業が多いためか、「授業を欠席した」り「授業に遅刻した」りする学生は 40%程度と、休んだり遅れたりすることなく授業に出席する学生のほうが多い。その反面、「授業をつまらなく感じた」(79.4%)り「授業中に居眠りをした」(60.3%)りする学生も多く、大部分の学生が大学の授業に退屈している様子が見受けられる。「授業中、教員の考え方や意見に異議を唱え」(18.1%)ることも少なく、総じてみれば、授業中の態度は消極的な傾向にある。

授業時間外の学修行動に目を向けてみると、「授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容について話したりした」学生は 70%をこえている。また、「教員に親近感を感じた」学生も 56.3%と半数を超えている。学生たちは授業に関する勉強やおしゃべりなどをつうじて他の学生と交流し、教員に対しても親近感を持っているようだが、「大学の教職員に将来のキャリアの相談をした」学生は 20.7%にとどまり、卒業後のキャリアを相談する学生はあまりいないことがみてとれる。また、「単位とは関係のない教員あるいは学生による自主的な勉強会に参加した」学生は 18.1%で、「教員の研究プロジェクトに参加した」学生は 9.1%と、ほとんどの学生が、授業に直接関係のない学修に参加していない。

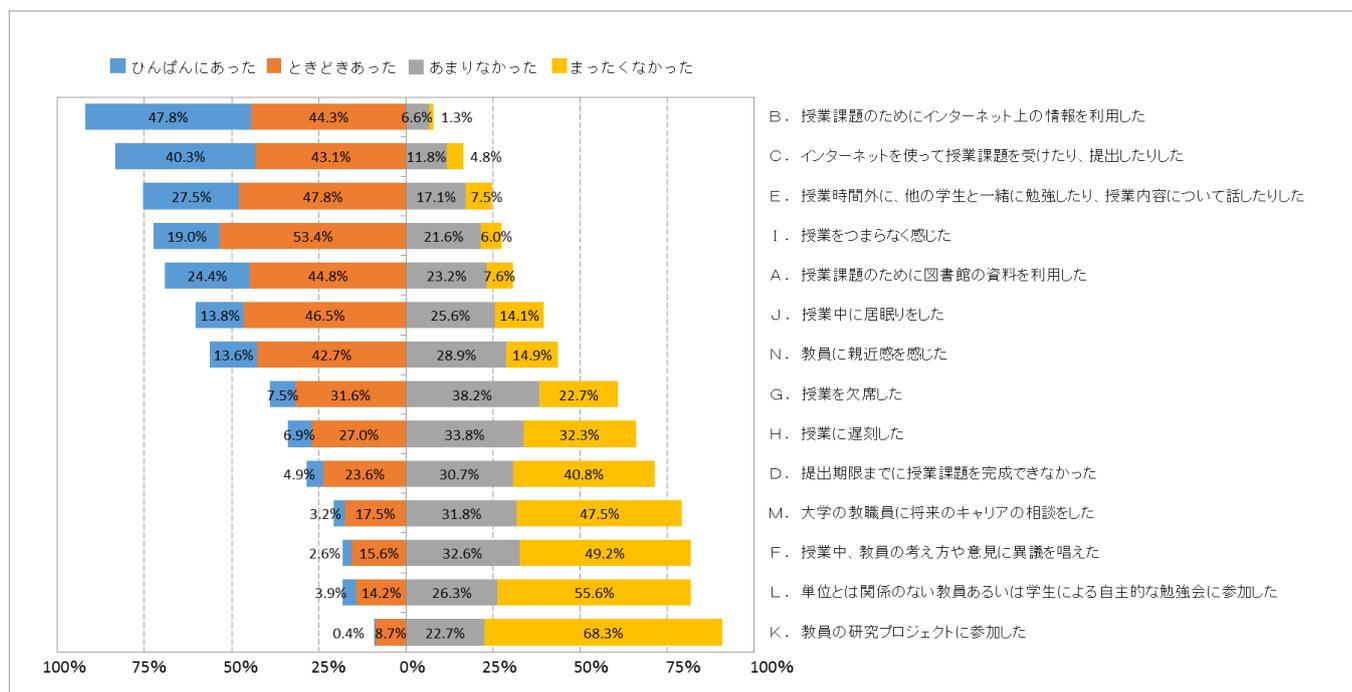


図 2.2 授業内外における学修行動の頻度

2.3 正課内活動や正課外活動に費やす時間

次に、学生たちが大学生活のなかでどのような活動に比重を置いているのかを、費やしている時間を通じてみていこう。図 2.3 は、「入学以来、あなたは次の活動に 1 週間あたりどのくらいの時間を費やしましたか」という質問項目に対する回答を、活動内容別に図示したものである。それぞれのバブル(円)の大きさ(面積)は、グラフの縦軸(Y 軸)にある A から I の各活動項目における活動時間の回答割合に比例する。たとえば、「授業や実験に出る」の軸を右横にみていくと、「全然ない」、「1 時間未満」、「1-2 時間」の軸上のバブルが小さい。これは、「全然ない」、「1 時間未満」、「1-2 時間」と回答した学生の割合が少ないことを意味する。さらに「11-15 時間」、「16-20 時間」、「20 時間以上」と右に進むにつれてバブルが大きくなっており、そのように答えた学生の割合が高くなっていることを示している。このようなグラフを用いることで、縦軸(Y 軸)に並べた各項目の回答が一か所に集中しているのか、あるいは全体に分散しているのか、回答割合の高い(あるいは低い)選択肢はどれか、といった大まかな回答傾向を視覚的に把握することができる。

1 週間のなかで「授業や実験に出る」時間は、「20 時間以上」の学生が最も多く、45%を占める。「16-20 時間」は約 16%、「11-15 時間」は約 10%、「6-10 時間」は約 14%となっている。授業や実験に出る時間が週に 5 時間未満の学生はわずかである。この結果から、多くの学生たちにとって、大学での授業や実験に出席することが生活のなかで大きな比重を占めていることがわかる。

それに対して、週のなかで「授業時間以外に勉強や宿題をする」時間は「1-2 時間」か「3-5 時間」であることが多く、回答割合はそれぞれ約 25%と 20%であった。全体的に、週あたりの授業外学修時間は 10 時間以下で約 70%となる。「全然ない」あるいは「1 時間未満」と答えた者は合わせて約 20%で、授業時間外に勉強する習慣をもたない学生もいる。このように、学生たちの生活時間における授業外の勉強時間の比重は小さい。なかには、授業と授業外学修の時間のバランスがとれている学生もいるだろうが、本調査の回答者全体でみると、授業形態(講義、演習、実験・実習・実技)ごとに定められた 1 単位に必要な授業時間に比して、授業外学修に取り組む時間は不足していることがよみとれる。

勉強のほかに、学生たちは授業時間外にどのような活動に取り組んでいるのだろうか。「オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する」時間が「全然ない」学生は約 40%、「1 時間未満」学生は約 35%、合わせて 75%と非常に多く、1 時間以上の学生はあまり多くない。

「部活動や同好会に参加する」時間が、「全然ない」学生は 55%と半数以上であり、部活動や同好会に参加する学生のなかで、週に「1-2 時間」(12.5%)が最も多く、「1 時間未満」(7.3%)、「3-5 時間」(11.5%)、「6-10 時間」(8.4%)と、1 週間の活動時間が 10 時間以下という学生が約 40%を占めており、本学学生は、部活動や愛好会活動に消極的であることがわかる。

「大学外でアルバイトや仕事をする」時間が「全然ない」学生は、約 55%と部活動や同好会に参加しない学生と同様、半数以上であった。アルバイトをしている学生でも、その活動時間は、「3-5 時間」12.5%、「6-10 時間」8.9%と多くはない。

「読書をする(マンガ・雑誌を除く)」時間については、全体的に短く、「全然ない」(40.0%)との回答割合が最も高く、「1 時間未満」23.6%、「1-2 時間」19.7%、「3-5 時間」9.4%、「6-10 時間」3.9%と、読書に長時間費やす学生は少ない傾向にある。

それに対して、「個人的な趣味活動をする(テレビやゲーム、映画鑑賞など)」ために費やす時間は週あたり「3-5 時間」費やしている学生が最も多いが(27.6%)、全体的に回答は分散傾向にある。活動時間が週に 1 時間を切る学生もいれば(「全然ない」4.9%、「1 時間未満」7.3%)、それと同数程度の学生が週に

「20 時間以上」(13.2%)も時間を割いている。

以上のように、学生たちは大学での授業には大きな時間的比重を置いているが、授業時間外の学修にかかる時間は少ない傾向にある。授業外の活動として、過半数の学生が大きな比重を置いていたのは、個人的な趣味活動であり、過半数の学生は部活動や同好会、アルバイトなどの活動をしていないことが分かった。また、読書時間やオフィスアワーなどをつうじて教員と面談する時間も相対的に短い傾向にあった。

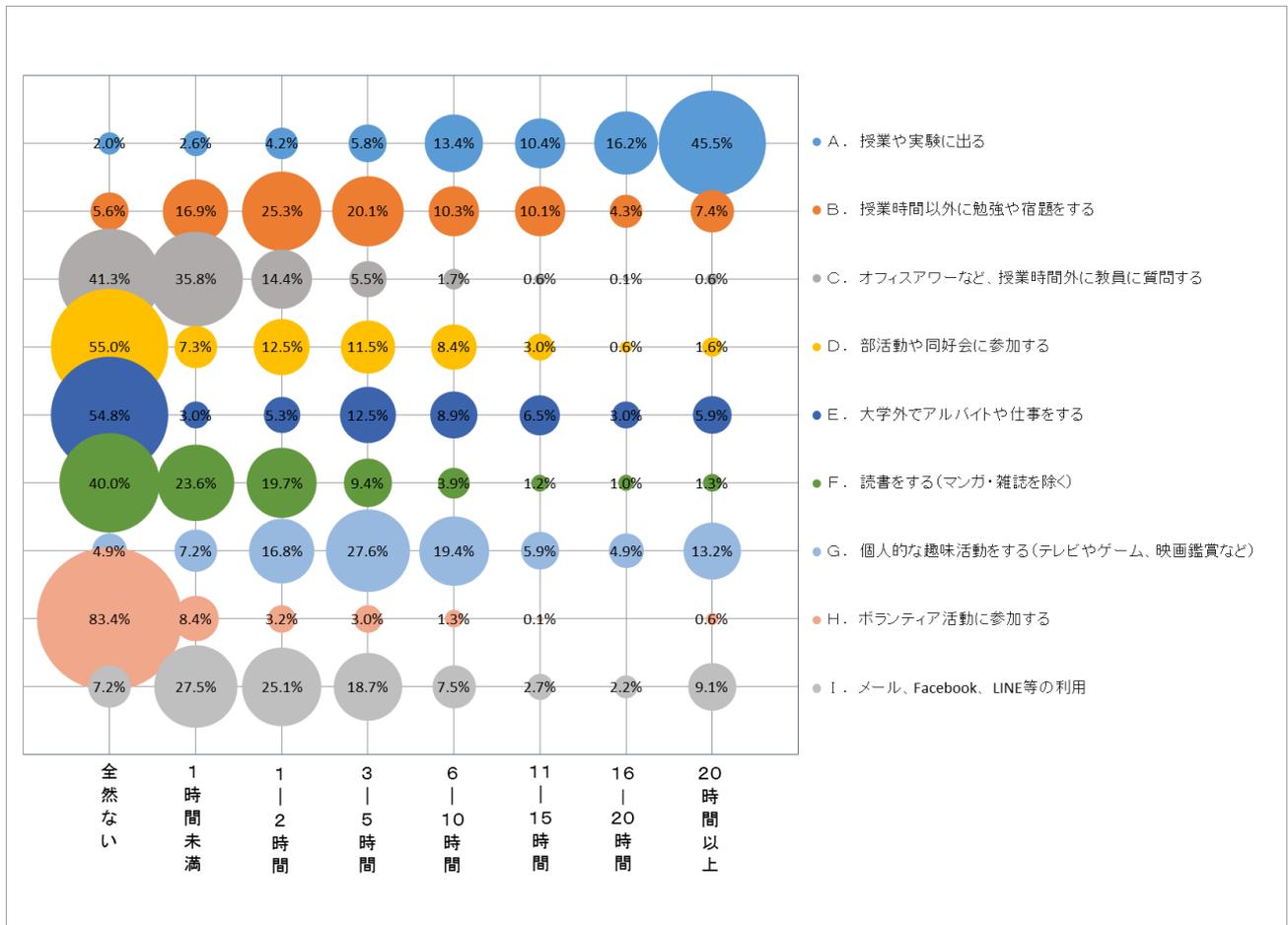


図 2.3 各種活動に費やす週あたりの時間

2.4 大学入学後の知識・能力の変化

学生たちは、大学側が提供している教育プログラムを通じて学修するとともに、過半数弱の学生は部活動や同好会活動、アルバイト、個人的な趣味にも取り組んでいる。これらの授業内外の学修経験や活動のなかで、学生はどのようなスキルを獲得したのだろうか。「入学時点に比べて、あなたの能力や知識はどのように変化しましたか」という質問項目に対する回答から、大学教育の成果や効果を調べてみよう。これらの質問項目には「大きく増えた」、「増えた」、「変化なし」、「減った」、「大きく減った」の5つの選択肢を設けた。結果をわかりやすくするために、図 2.4 には「減った」、「大きく減った」、「大きく増えた」、「増えた」それぞれの回答割合を示し、「変化なし」の回答割合は示していない。

ほとんどの知識や能力に関して、「減った」と感じている学生は10%未満にとどまり、伸びたと評価している学生のほうが多い。これら20項目を、ここでは「知識・理解」、「汎用的技能」、「態度・志向性」の3領域に分類して、回答傾向を検討していく。

まず「知識・理解」の領域からみていこう。「専門分野や学科の知識」(85.9%)や「一般的な教養」(76.4%)について、大多数の学生が「大きく増えた」あるいは「増えた」と感じている。一方で、「国民が直面する問題を理解する能力」(33.6%)、「グローバルな問題の理解」(25.3%)、「地域社会が直面する問題を理解する能力」(35.5%)を増やした学生は少ない。基礎知識を応用し、実社会における個別具体的で複雑な問題を理解するための能力は、それほど高まっていないようである。

次に、学業だけでなく職業や日常生活のなかでも必要とされる「汎用的技能」の獲得状況を確認する。約70%の学生が「分析力や問題解決能力」が増えたと答えており、「コンピュータの操作能力」、「コミュニケーションの能力」においても約60%の学生が増えたと答えている。また、「批判的に考える能力」、「プレゼンテーションの能力」、「文章表現の能力」についても、半数程度の学生が高まりを感じている。これに対して、「外国語の運用能力」(19.6%)を伸ばした学生は少ないだけでなく、約15%が低下を感じている。「数理的な能力」に関しては、大学入学後に能力が増えた学生が38.7%いる反面、能力が落ちたと感じている学生も10%程度いることがわかった。このように、多様な情報を収集・処理できるコンピュータの操作スキルを身につけるとともに、学生たちは先述の基本的な知識や技能を使って、問題を解決するために必要な情報を集め、分析・整理しながら、複眼的、論理的に考える力も獲得している様子が見えてくる。また、自身の考えや主張をまとめて、他者に対して論理的に説明するスキルについても獲得していることがうかがえる。本調査では多くの学生にとって、母語である日本語のコミュニケーション・スキルに比べ、外国語の運用能力の伸びは鈍く、能力の低下を感じている学生も相対的に多いことがわかった。

以上の「知識・理解」と「汎用的技能」を活用して実際の行動につなげていく「態度・志向性」は入学後にどのように変化したのだろうか。過半数の学生が「他の人と協力して物事を遂行する能力」が増えたと答えているものの、「リーダーシップの能力」(30%)はあまり伸びていない。入学後に50%程度の学生が「時間を効果的に利用する能力」を高めているが、約10%は能力が低下したと答えている。「卒業後に就職するための準備の程度」を増やした学生は49.7%であった。概して、入学後に多くの学生が協調性や社会性を高めているのに対し、他者に対して方向性を示したり目標を実現するために他者を統率したりする能力を伸ばした学生は少ない。また、時間管理力を獲得した学生もいる一方で、大学生生活のリズムをうまくつかめず、時間のコントロールができない学生も少なからずいることがわかった。

総じてみれば、授業内外での活動を通じて、学生たちは学業面の知識だけでなく汎用的な知識や能力、態度を獲得しており、大学教育の成果が出ているといえるだろう。しかしながら、時間管理能力、外国語の運用能力、数理的な能力については低下を感じている学生が一定数みられ、大学教育には影の部分もあ

ることがわかった。

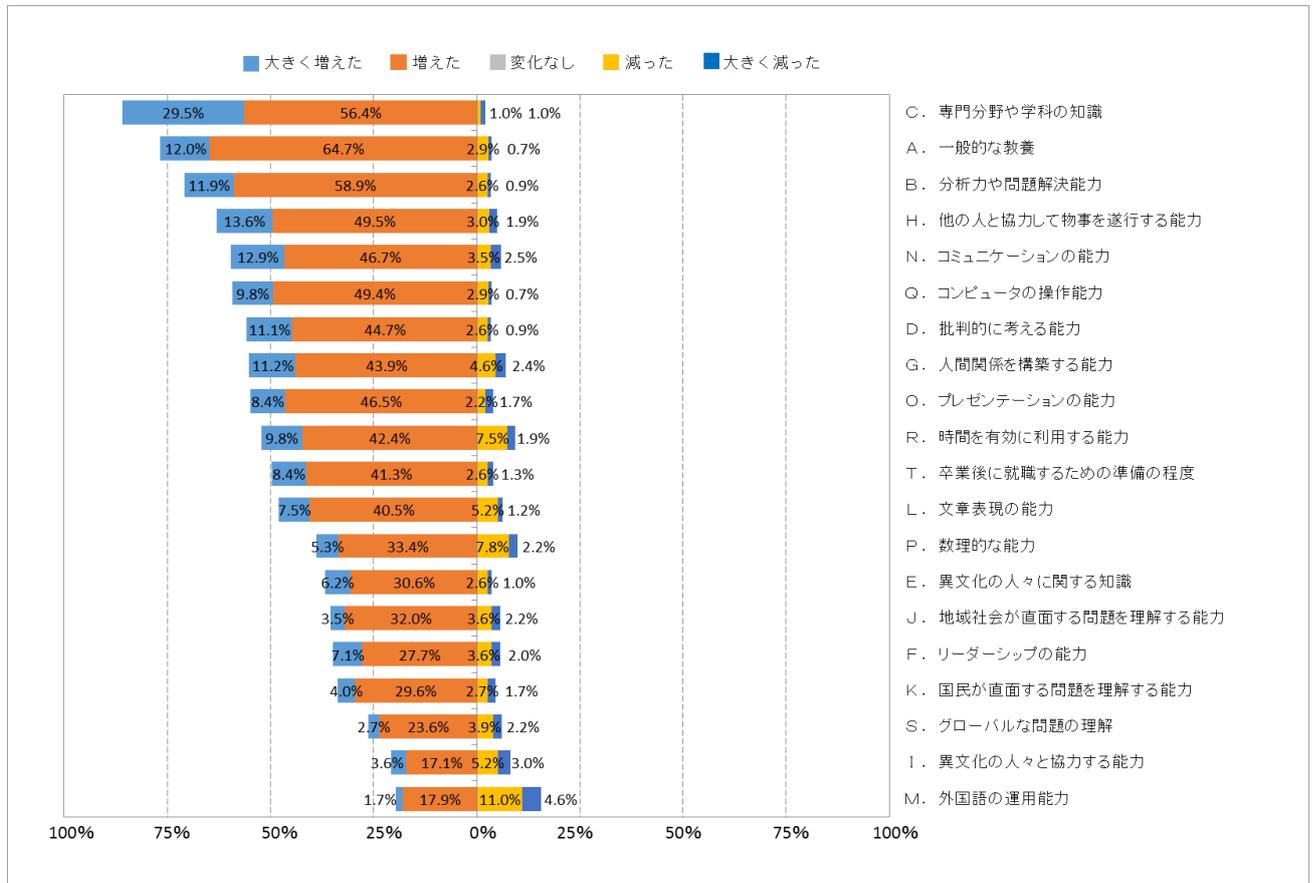


図 2.4 大学入学後の知識・能力の変化

第3章 学びや大学生活に関する意識

本設問では、大学生活のなかでの学びに対して、学生たちがどのように評価しているのかを明らかにする。学生本位の教育改革を進めるうえで、大学生活に関する、学生たちの価値観、ひいては大学教育に対する意味づけを探ることは欠かせない。具体的には、大学生活への適応感、学生生活の充実感、大学の教育内容および教育環境に対する満足感、大学（学部）卒業後の予定進路といった、学生たちの情緒的な側面を検討していく。

3.1 大学生活への適応感

本学に入学してからこれまでの学生生活の中で、学修面や生活面、人間関係などについて、どの程度適応できているのだろうか。「本学に入学してから、あなたは次のことがらについてどれくらいうまくいきましたか」という設問に対する回答を示した図 3.1 に基づいて、学生たちの適応感を確認する。

大学生活のなかで、「他の学生との友情を深める」ことに成功した学生（「とてもうまくいった」、「いくらかうまくいった」の回答割合の合計）は約 80%となっている。また、「大学教員と顔見知りになる」についても約 70%となっており、学生たちは友人関係をうまく構築できており、教員との関係についても比較的良好的な関係を築いているようである。しかし、「大学教員の学問的な期待を理解する」ことにうまくいかなかったと感じている学生が 43.8%おり、教員の求める期待と学生の理解に多少の乖離がみられるようである。

また、大学での学修スタイルに関しては、適応できている学生とそうでない学生がほぼ半々に分かれている。詳しくみていくと、「大学の学生向けサービスを上手に利用」できている学生は 63.4%、「時間を効果的に使う」ことができている学生は 50.9%、「大学が求める水準に応じて学修」できている学生は 47%、「効果的に学修する技能を修得」できている学生は 48.4%であった。

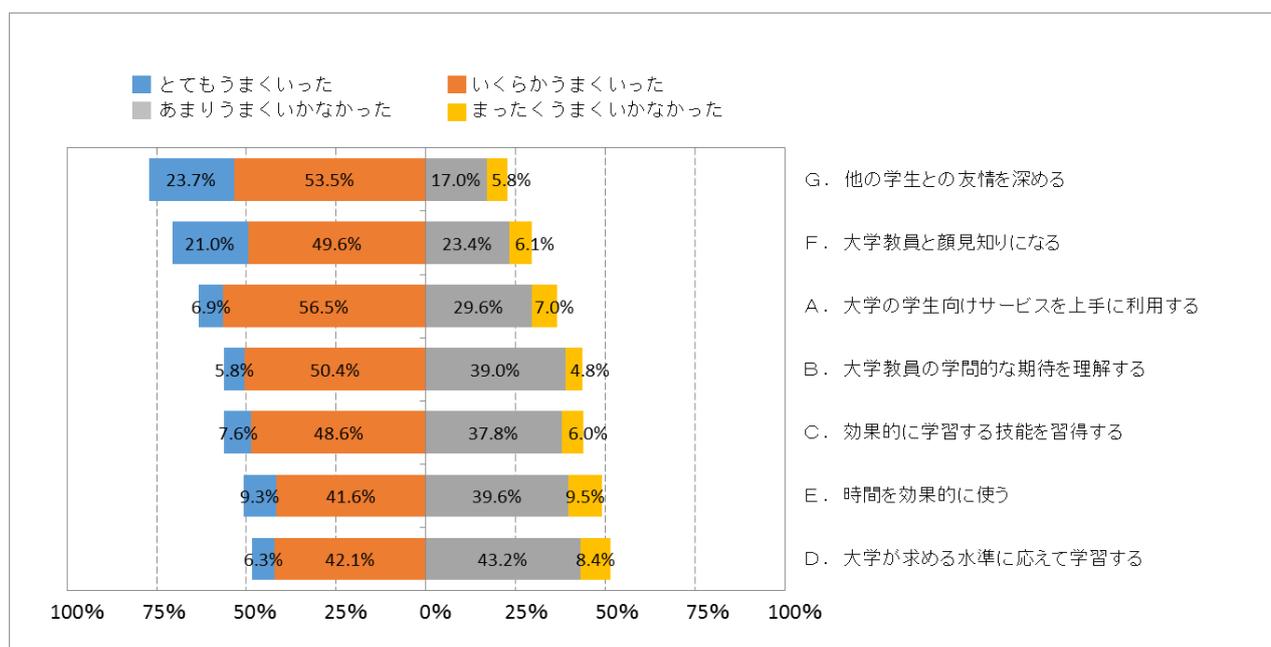


図 3.1 大学生活への適応感

3.2 大学の教育内容に対する満足感

大学が提供しているさまざまな教育プログラムに対して、学生たちはどれくらい満足しているのだろうか。図 3.2 は、「あなたは、本学の教育内容にどれくらい満足していますか」という設問に対する回答を項目別に図示したものである。この設問には「とても満足」、「満足」、「どちらでもない」、「不満」、「とても不満」の5つの選択肢を設けたが、結果をわかりやすく示すために、「どちらでもない」との回答は図 3.2 に示していない。

どちらかというと、学生たちは教育内容それ自体よりも、大学の雰囲気や満足している傾向にある。「他の学生と話をする機会」に満足している（「とても満足」、「満足」との回答割合の合計）学生が最も多く、57.1%を、「大学での経験全般について」は、50.3%を占める。ほかの項目については、満足している学生が半数を下回り、「大学のなかでの学生同士の一体感」、「多様な考え方を認め合う雰囲気」に対して満足している学生は約 40%である。

教育内容や授業に対する満足感について、「将来の仕事と授業内容の結びつき」について 54.3%の学生が満足感を持っている。「授業の全体的な質」、「全学共通教育の授業」、「初年次生を対象とした教育プログラム内容」、「1つの授業を履修する学生数」、「日常生活と授業内容との関連」、「個別の学生指導や援助（履修相談など）」については、いずれも 40%程度の学生が満足している。加えて、「授業の全体的な質」や「全学共通教育の授業」、「初年次生を対象とした教育プログラム内容」といった項目については、10%強の学生が不満をもっている。科目に対する関心の低さや入学時の学力差が数字として表れたと考えられる。

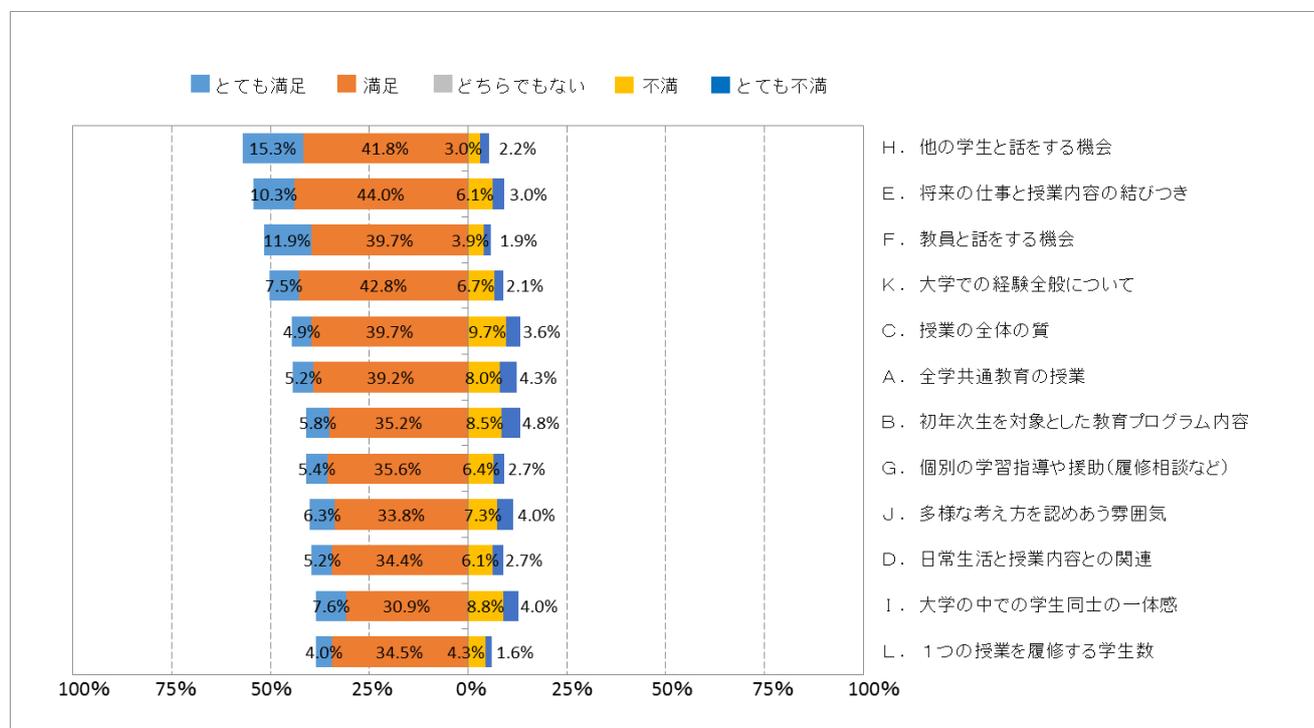


図 3.2 大学の教育内容に対する満足感

3.3 大学の教育環境に対する満足感

学生たちがより充実した大学生活を送るために、大学側は設備や学生支援制度などを提供している。それでは、学生たちは大学における教育環境に対してどの程度満足しているのだろうか。図 3.3 は、「あなたは、本学の設備や学生支援制度にどの程度満足していますか」という設問に対する回答を項目別に示したものである。この設問には「とても満足」、「満足」、「どちらでもない」、「不満」、「とても不満」の5つの選択肢を設けている。結果をわかりやすく示すために、図 3.3 には「どちらでもない」との回答を示していない。

全般的な傾向として、大学の設備や学生支援制度に不満をもっている学生は少ない。多くの学生が日常的に利用すると考えられる設備や学生支援制度については、満足感が高い。満足している学生（「とても満足」、「満足」との回答割合の合計）は、「図書館の設備（蔵書やレファレンスサービス）」69.8%、「コンピュータの施設や設備」60.2%、「インターネットの使いやすさ」51.2%、「コンピュータの訓練や援助」48.9%、「厚生館施設」43.2%、「体育施設」42.0%となっている。ただし、「インターネットの使いやすさ」や「厚生館施設」に関しては不満を持っている学生が約 15%と少なくない。また、学生全員が利用するとは限らない設備や支援制度の満足感も比較的高く、たとえば「実験室の設備や器具」51.1%や「奨学金など学費援助の制度」39.5%、「健康保健サービス（心身の健康に関わる問題についての診療や相談）」40.3%となっている。「キャリアカウンセリング（就職や進学に関する相談）」については、満足している学生は28.3%と低いものの、不満を抱えている学生も少ない。

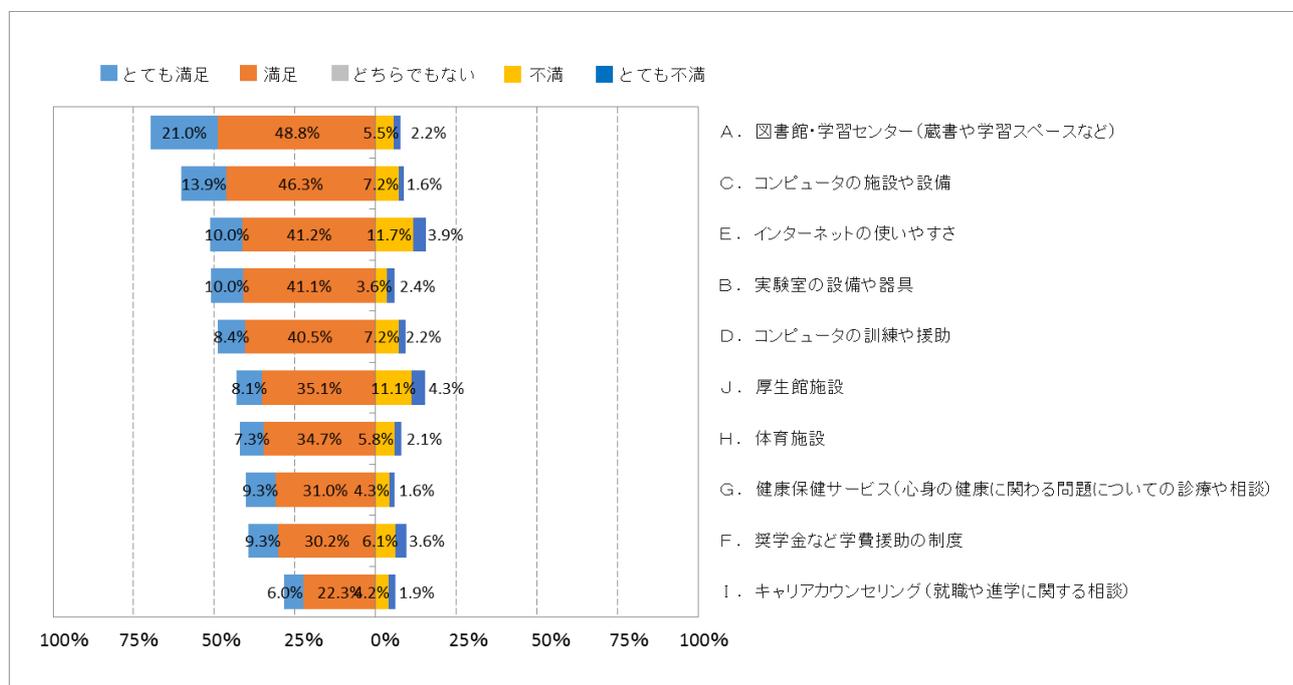


図 3.3 大学の教育環境に対する満足感

3.4 学生生活の充実度

漠然と「あなたの学生生活は充実していますか？」との問いに、「充実している」や「まあまあ充実している」と回答した学生は、約 75%となっており、多くの学生は、学生生活には充実感を持っているようである。

表 3.1 学生生活の充実度

学生生活の充実度	回答割合
充実している	18%
まあまあ充実している	58%
あまり充実していない	19%
充実していない	5%
合計	100%

3.5 学部卒業後の予定進路

最後に、大学の学部卒業後の予定進路に基づいて、学生たちが将来設計のなかで大学教育をどのように位置づけているのかを調べる。表 3.2 は、「あなたは学部卒業後、どのような進路を考えていますか」という設問に対する回答を示したものである。この設問には、「就職する」、「大学院に進学する」、「留学する」、「他大学に（編）入学する」、「専門学校に入学する」、「まだわからない」、「その他」の7つの選択肢を用意した。

ほとんどの学生が学部卒業後の進路として「就職」を選んでいる（79%）。一方、「大学院進学」予定者は 4.0%である。なかには、「まだわからない」と答えた学生もおり（13%）、進路を決めかねている者もいる。

表 3.2 学部卒業後の予定進路

学部卒業後の予定進路	回答割合
就職する	79%
大学院に進学する	4%
留学する	1%
他大学に（編）入学する	1%
専門学校に入学する	0%
まだわからない	13%
その他	1%
合計	100%

第4章 英語の学修状況

本章では、学生たちの英語学修の実態について明らかにする。英語は最も共通性の高い教育プログラムになっているため、専門分野を問わない教育成果の共通指標になりうると考えられる。

ここではおもに、3つの側面から英語の学修状況を検討する。第一に、英語の標準テストの受験経験や海外渡航経験を手がかりとして、授業以外で英語と接する機会について調べる。第二に、学生たちの英語運用能力の熟達度レベルを、ヨーロッパ言語共通参照枠組み Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) に基づいて確認していく。最後に、英語に対する好感度や苦手意識の程度から、学生たちが英語に対してどのような意識を抱いているのかを示す。

4.1 英語と接する機会

学生たちは、授業以外のどのような場面で英語と接してきたのだろうか。授業以外の英語の学修機会を調べるために、(1) 実用英語技能検定(英検)やTOEIC、TOEFLといった英語に関する標準テストの受験、(2) イギリス、アメリカ、カナダなどの英語圏への海外渡航に注目し、それぞれの経験者の割合を示していく。

図4.1は、各種の英語に関する標準テストについて、学生たちの受験経験率を示したものである。この設問は、今までに受験し、合格またはスコアを取得したテストをすべて回答してもらった複数回答の形式をとっている。

今までに英語の標準テストを受験したことのない学生は48.7%に上り、残り51.3%は何らかの標準テストを受験したことがある。このことから、本学学生は、高校や大学の授業以外の場面において、半数の学生は、標準テストを受けるために英語の勉強に取り組んだ経験をもっていないと考えられる。また、何らかの標準テストを受験した学生が最も多く受験したテストは、「実用英語技能検定(英検)」で、46.4%の学生が受験経験をもつ。それに対して、ほかのテストの受験経験者は2%を下回る。詳しくみていくと、「TOEIC公開テスト」1.5%、「TOEIC IPテスト(団体特別受験)」1.1%、「TOEIC Bridgeテスト」0.7%、「TOEFLテスト ITP」0.2%と続いている。ほかのテストの受験経験者は1.3%となっている。

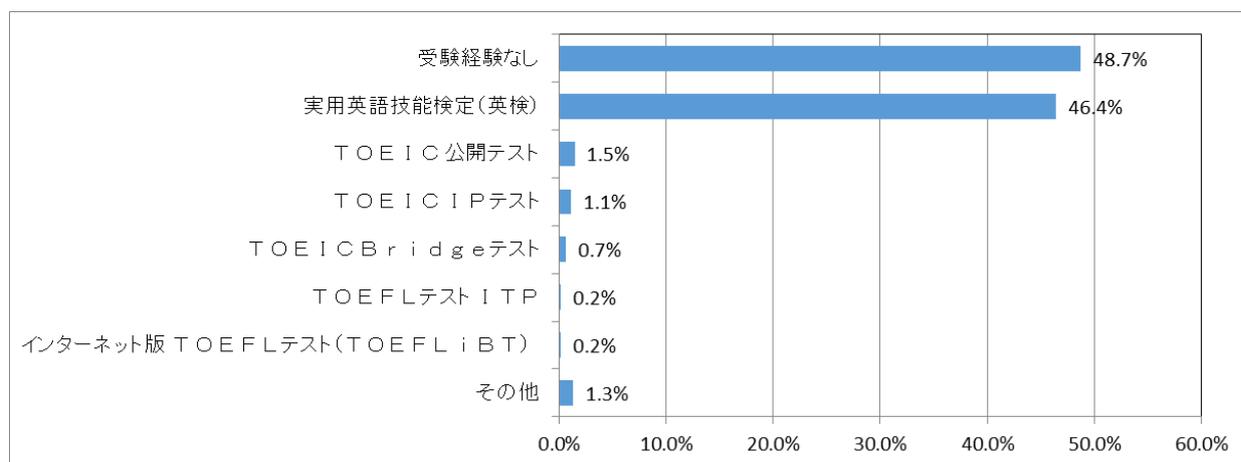


図4.1 英語標準テストの受験経験者の割合

4.2 英語運用能力の熟達度レベル分布

次に、海外渡航経験の有無についてみていこう。学生たちはこれまでに英語を実践的に活用したことがどのくらいあるのだろうか。図 4.2 は、アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドなど英語圏への渡航経験率を示したものである。この設問も複数回答の形式をとっている。

ほとんどの学生は英語圏に渡航したことがなく、渡航経験をもつ者は 20%を下回る。渡航の目的は「旅行」が最も多く、13.0%を占める。ホームステイや留学をするために、英語圏に渡ったことのある学生は 5%程度で、1ヶ月未満の短期のホームステイや留学がほとんどである (2.9%)。なかには、英語圏に住んでいたことのある学生もいるが、その割合はわずかである (0.5%)。

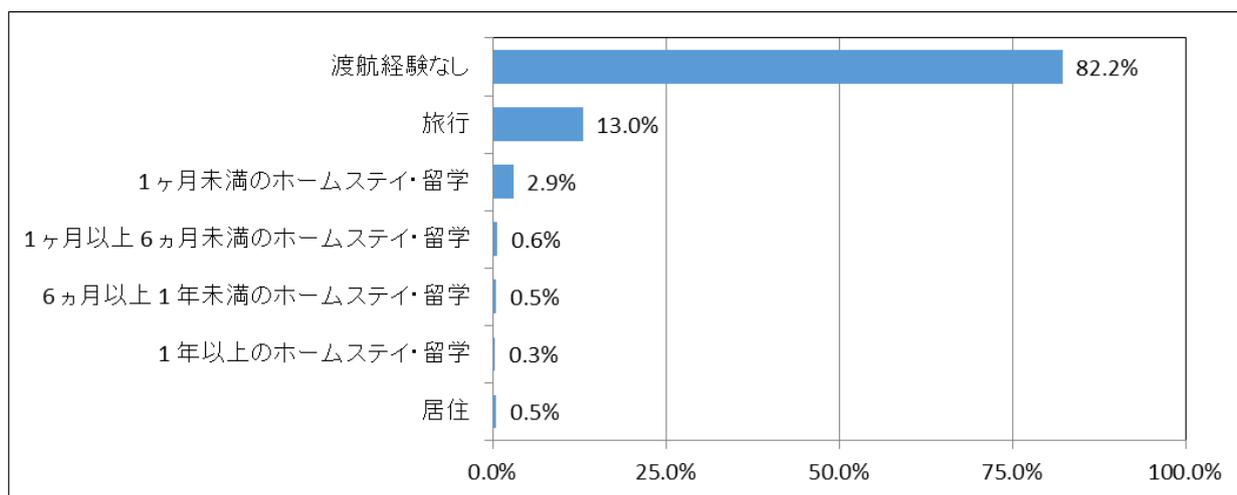


図 4.2 海外渡航経験者の割合

4.3 C E F R尺度に基づく英語運用能力の熟達度レベル

大学教育は、学生たちの英語運用能力にどのような効果をもつのだろうか。第2章で示したように、英語を含む外国語の運用能力について、約20%の学生が入学後に伸ばしている一方で、逆に能力の低下を感じている学生も15%ほどいた。入学時と調査時の英語運用能力のレベルの構成比を確認したうえで、具体的にどのような変化があったのかを調べる。

学生たちの英語運用能力を測定するために、本調査では、ヨーロッパ諸国内で外国語教育の学修、教授、評価のためのベンチマークとして導入されている「ヨーロッパ言語共通参照枠組み (CEFR)」という汎用性のある尺度を用いた。CEFR尺度は、言語運用能力を3領域5技能「理解すること」(聞く力、読む力)、「話すこと」(会話力、表現力)、「書くこと」(書く力)に分け、各技能について「～ができる (can do)」を用いた能力記述文によって熟達度レベルを測定できるように構成されている。

表 4.1 C E F Rの共通参照レベルと全体的な尺度

基礎段階の言語使用者	
A1	<ul style="list-style-type: none"> 具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。 自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりできる。 もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる。
A2	<ul style="list-style-type: none"> ごく基本的な個人的情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。 簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。 自分の背景や身の回りの状況や、直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる。
自立した言語使用者	
B1	<ul style="list-style-type: none"> 仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。 その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。 身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。 経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。
B2	<ul style="list-style-type: none"> 自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解できる。 お互いに緊張しないで母語話者とやり取りできるくらい流暢かつ自然である。 かなり広汎な範囲の話題について、明確で詳細なテキストを作ることができ、さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる。
熟達した言語使用者	
C1	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。 言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる。 複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細なテキストを作ることができる。その際テキストを構成する字句や接続表現、結束表現の用法をマスターしていることがうかがえる。
C2	<ul style="list-style-type: none"> 聞いたり、読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。 いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構成できる。 自然に、流暢かつ正確に自己表現ができ、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。

この尺度によって、学修者の熟達度を客観的な基準で示すことができるようになる。熟達度レベルは初級（A）「基礎段階の言語使用者」、中級（B）「自立した言語使用者」、上級（C）「熟達した言語使用者」の3つに大きく区分され、さらにそれぞれが低（1）と高（2）に細分化され、全部で6つのレベル（A1、A2、B1、B2、C1、C2）に分かれている。これら6つのレベルは、言語学修者にとって意味ある学修プロセスとなっているが、「枝分かれ方式」が採用されているので、特定のレベルを細分化したり、逆に削ったりすることも可能である。つまり、共通の枠組みと相互連関を保ちながら、利用者の目的に応じて柔軟にレベルを分けることができるようになっているのである（表 4.1）。

本調査では、聞く力、読む力、表現力、書く力のレベルを6段階で測定できるように尺度を準備し、会話力については初級レベルをさらに細分化し（A1、A2、B1、B2、C1、C2）、8段階で尺度を構成した。自身の英語運用能力のレベルを学生が自己評価した結果を、その学生の英語運用能力の熟達度レベルとみなして分析する。

大学の英語教育において、等教育段階までの到達目標に関しては、文部科学省が平成15（2003）年3月に発表した『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』のなかで、「中学校・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションができる」と明記されている。中学校卒業段階では「挨拶や応対、身近な暮らしに関わる話題などについて平易なコミュニケーションができる」ことが目標として掲げられおり、具体的には卒業生の平均として実用英語技能検定（英検）3級程度が目指されている。これをCEFRレベルに置き換えると、A1レベルに相当する。高校卒業段階の目標は、「日常的な話題について通常のコミュニケーションができる」ことに設定されている。卒業生の平均として英検準2級から2級程度が想定されており、CEFRレベルでいえばA2からB1レベル程度である。それでは、実際のところ、学生たちの英語力はどのレベルまで到達しているのだろうか。

図 4.3 は、入学時および調査時（2015年8月）の2時点における、英語運用能力の熟達度レベルの構成比を示したものである。上級レベルに相当するC1、C2に到達している学生が少なかったため、ここではひとまとめにしてCレベルとして扱う。

聞く力の熟達度レベルの構成比は、入学時は初中級のA1、A2、B1がそれぞれ約90%を占める。初級レベル（A）が80%を超えており、中上級レベル（B2、C）に到達している学生は10%を下回っている。これに比べると、調査時にはA1が14ポイント減り、B1が6ポイント高まっている。全体的にみて、学生たちの聞く力は入学から、基礎的な段階から中級レベルへと僅かにシフトしていることがわかる。

読む力について、入学時に中級レベル（B1、B2）に到達していた学生は、全体の約30%である。詳しくみていくと、A1が35.2%、A2が30.1%、B1が26.0%、B2が6.7%、Cが1.9%である。入学時に比べて、調査時にはA1の学生が約10ポイント減り、逆にB1は約10ポイント増えている。読む力については全体的にレベルアップしていることがわかる。

会話力の熟達度レベルに関しては、入学時点で約90%の学生は初級レベルであり、ほかの技能に比べて、B1以上のレベルに到達していた学生がきわめて少ない（7%）。構成比としてはA1が最も高く、全体の50%程度を占める。A1.1は20%程度、A2.1（7.3%）、A2.2（12.7%）であった。調査時の熟達度レベルの構成比をみると、A1において12ポイント程度減っているが、最も基礎的なレベルであるA1.1が5ポイント増えている。会話力に関しては、初級レベルの学生で会話力が入学時点よりも落ちていると感じている一方、中上級レベル学生で、わずかながらレベルアップしている。

表現力についても、入学時に初級レベルの学生が全体の70%を占めており、調査時には、A1が6.5ポイント減少し、その他のレベルは全般的に微増している。

書く力についても、入学時から調査時にかけて、全体的に能力が高まっていることがみてとれる。入学時に初級レベルだった学生が 79.5% (A1 49.1%、A2 30.4%)、中級レベルが 18.1% (B1 12.9%、B2 5.2%) である。調査時には A1 が 10 ポイント減り、B1、B2 それぞれが数ポイント増えた。

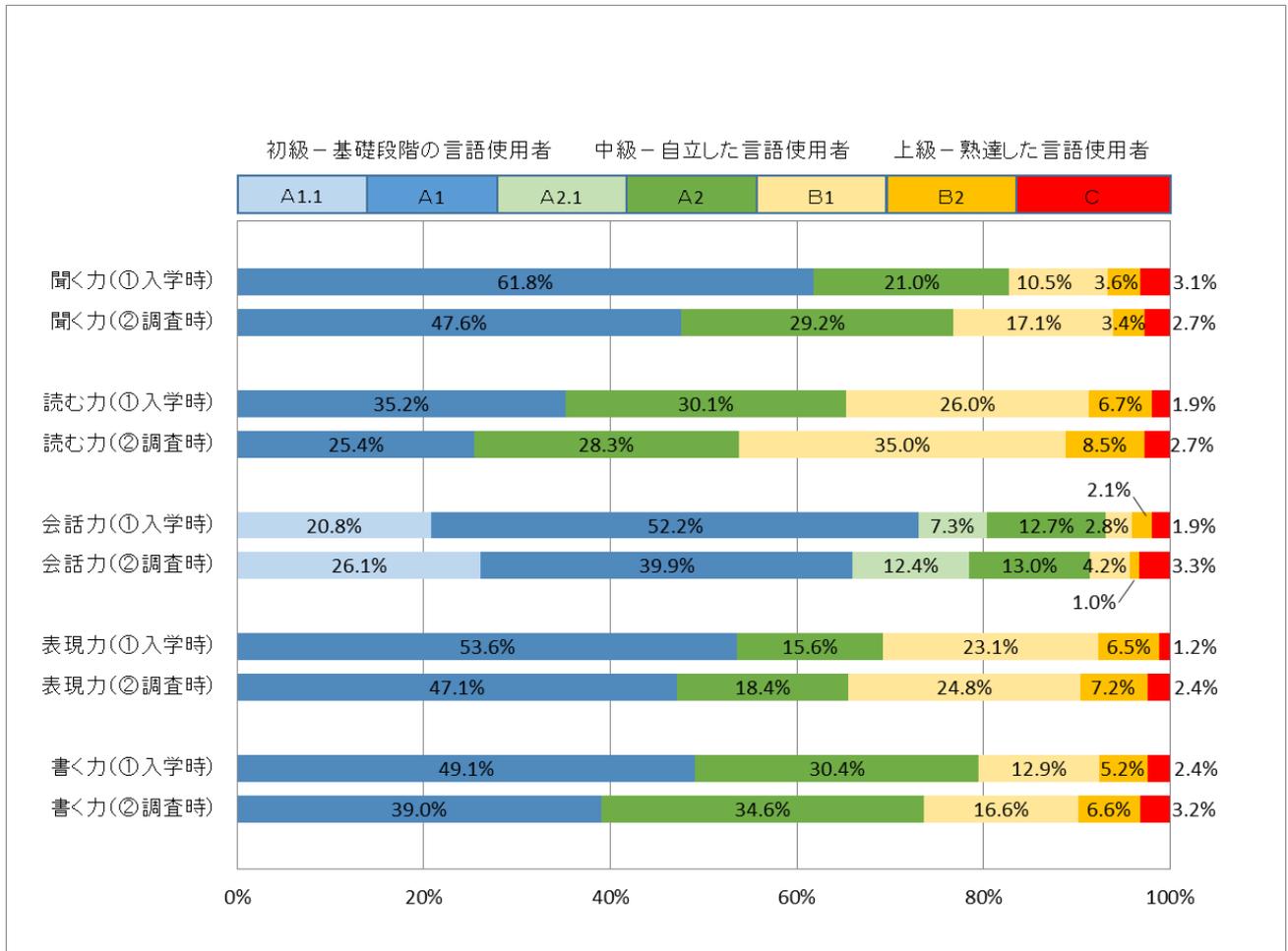


図 4.3 英語運用能力の熟達度レベル構成比

4.4 英語に対する意識

最後に、学生たちの英語に対する意識を確認しておこう。図 4.4 は、学生たちの英語に対する好感度を示したものである。英語が好きな学生は、全体の 1/3 であり、そうでない学生が大半を占める結果となった。詳しくみていくと、「好き」が 11%、「どちらかといえば好き」が 21%、「好きでも嫌いでもない」28%、「どちらかといえば嫌い」18%、「嫌い」22%である。英語に好感をもっている学生は相対的に少なかった。

また、英語に対する苦手意識を示したのが図 4.5 である。英語が得意と答えた学生は 12%であり、「とても得意」な学生はわずか 2%、「どちらかといえば得意」な学生は 10%程度にとどまる。英語に対して苦手意識を抱いている（「とても苦手」あるいは「どちらかといえば苦手」と答えた）学生は全体の 62%を占め、残り 26%が「得意でも苦手でもない」と中庸な回答をしている。

本学の学生は、英語に対して自信がなく、強い拒絶反応を示している。学生が苦手だと思っていることに対して、「英語は楽しい」という体験を与え自信を持たせることで、学修の効果は高まるのかもしれない。英語に限らず、ほかの能力にもあてはまることだが、その能力に何らかのかたちで自信をもつことで、苦手意識を乗り越え、さらに能力を伸ばそうと意欲的に学修に取り組む学生も増えるのではないだろうか。

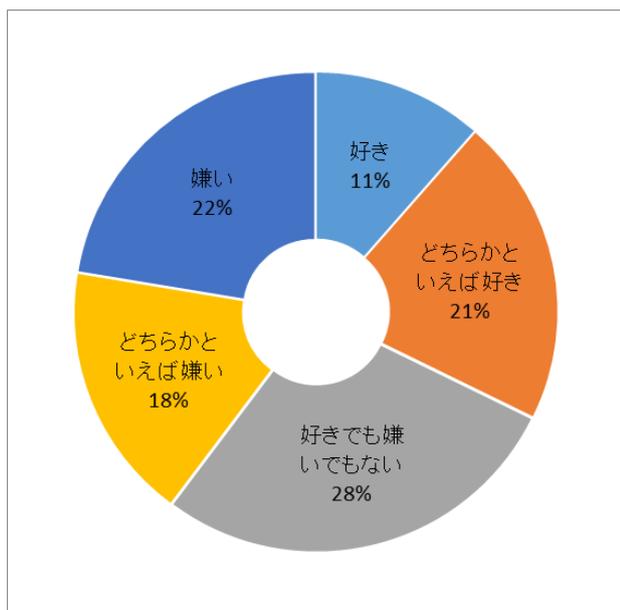


図 4.4 英語に対する好感度

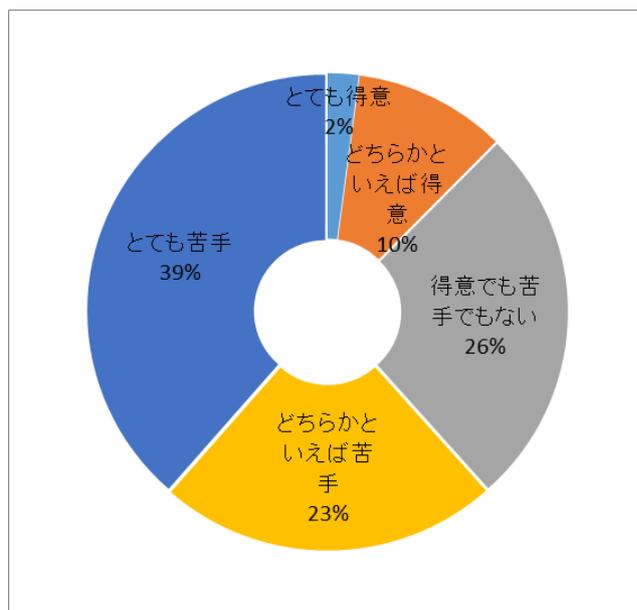


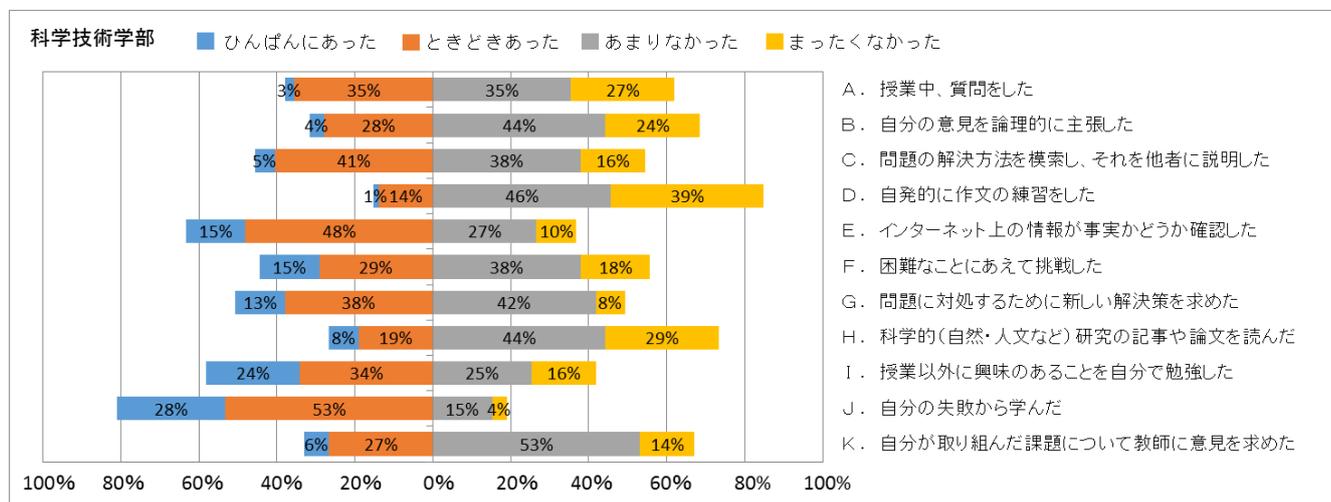
図 4.5 英語に対する苦手意識

第5章 付録

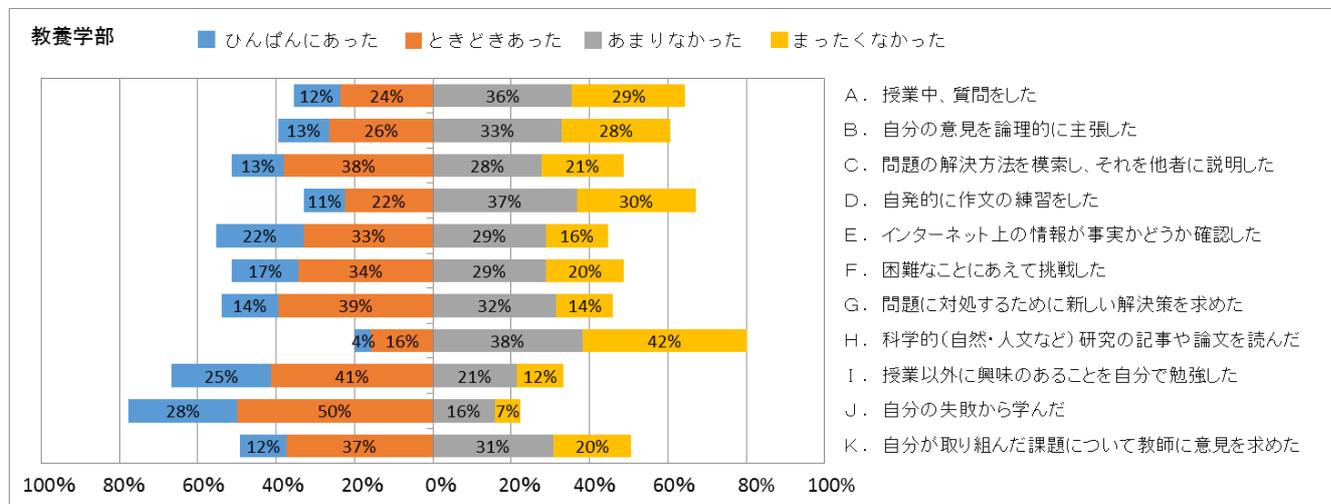
5.1 高校時代の学習経験（学部別集計結果）

・あなたが高校3年生だった時、次のことがらをどの程度しましたか。

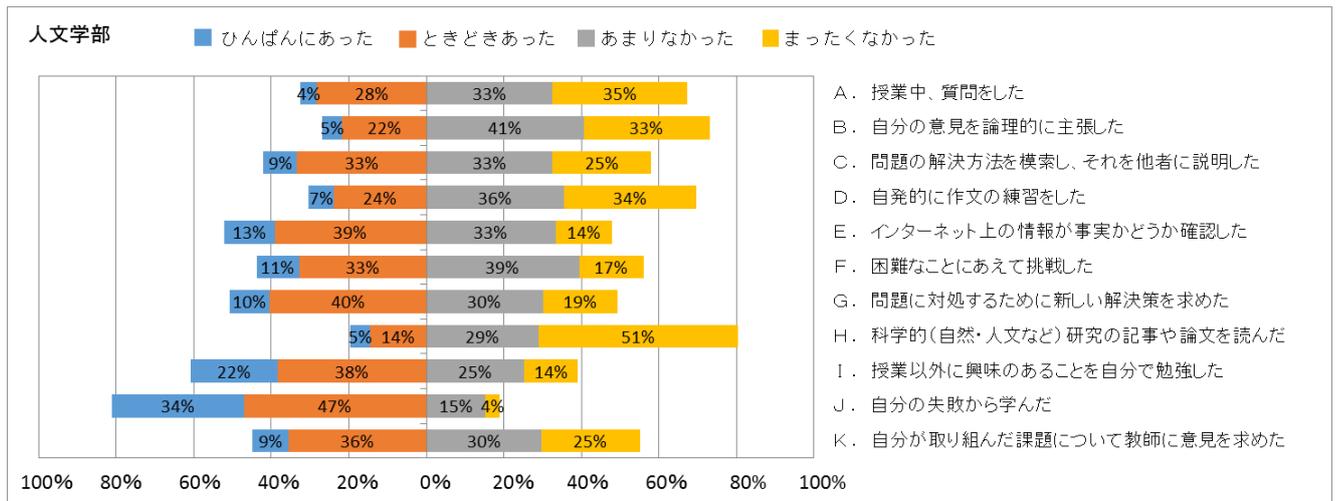
科学技術学部



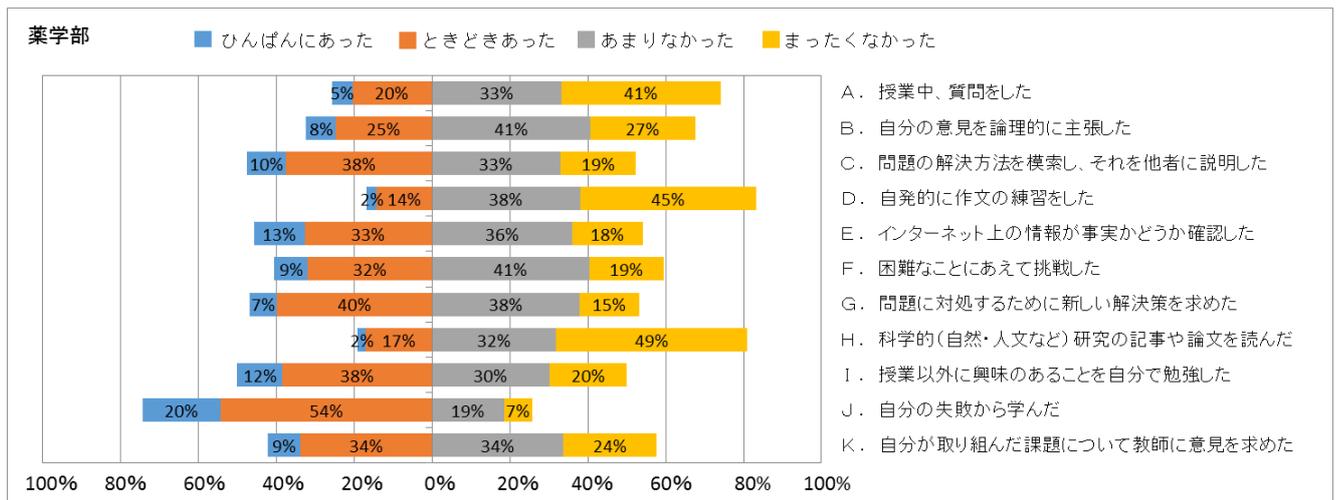
教養学部



人文学部



薬学部

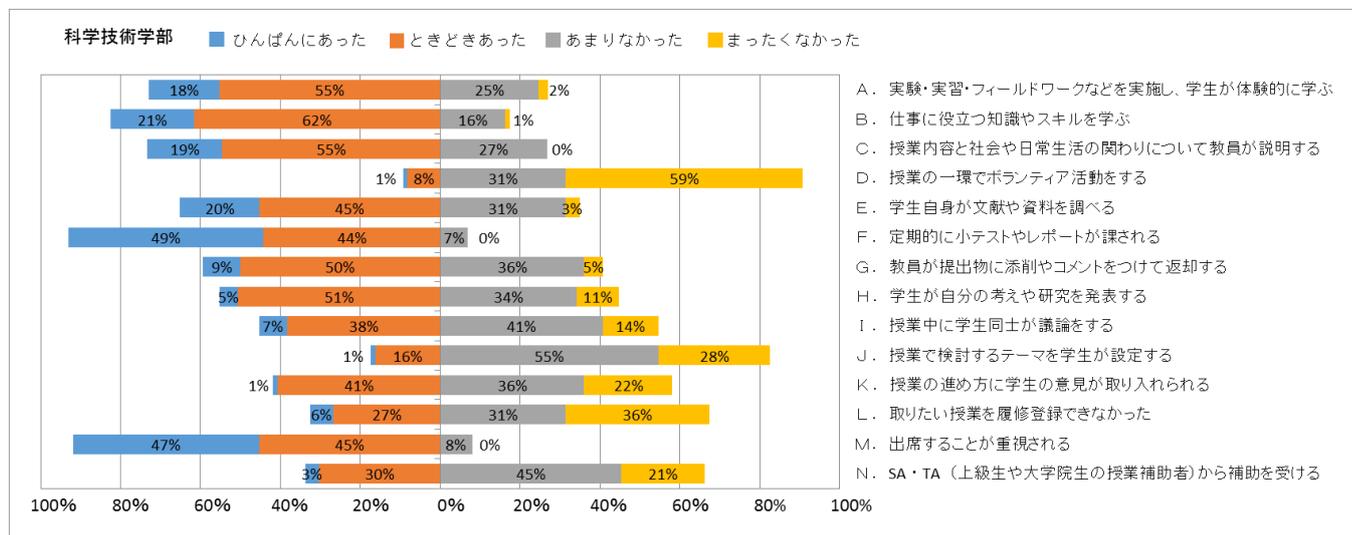


5.2 大学における学びの状況（学部別集計結果）

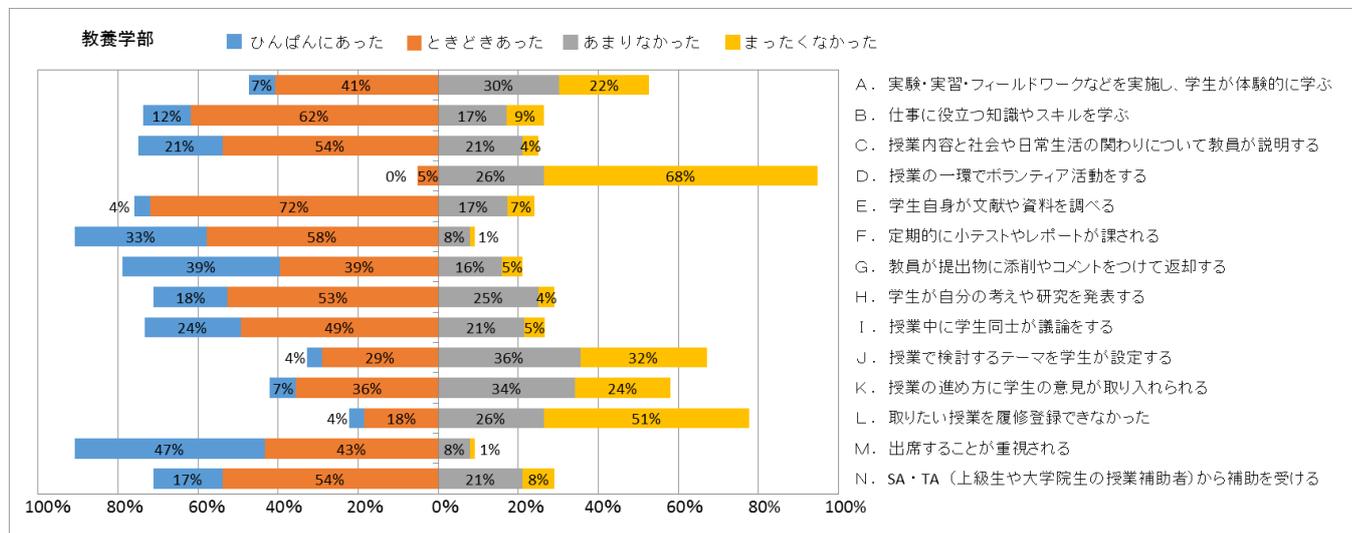
5.2.1 授業をつうじた学修経験

- ・あなたが受講した大学の授業で、次のようなことを経験する機会はどのくらいありましたか。

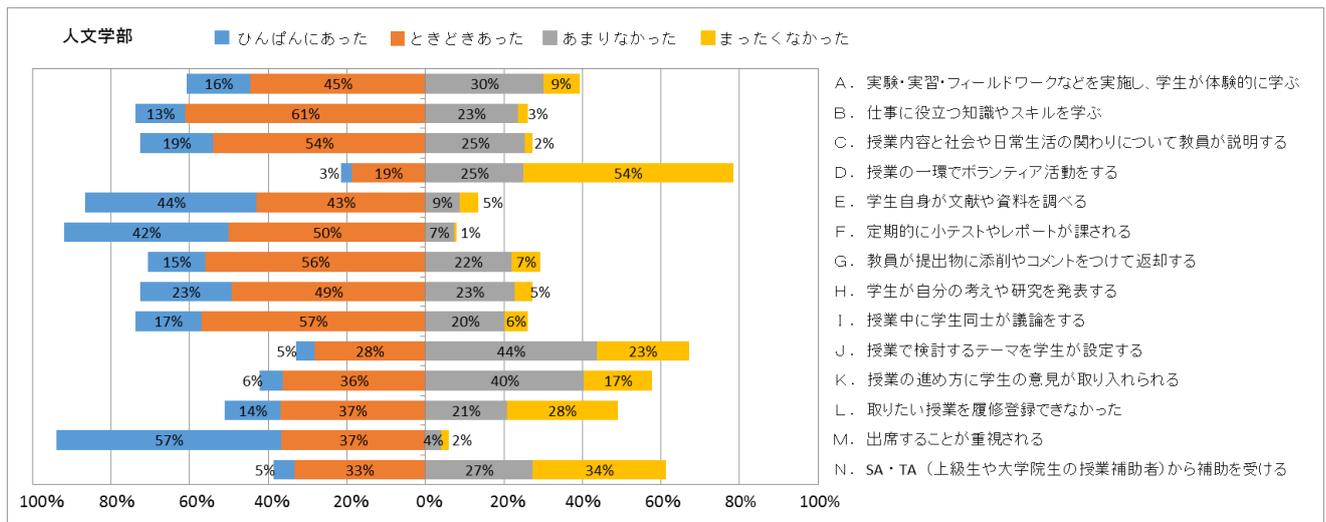
科学技術学部



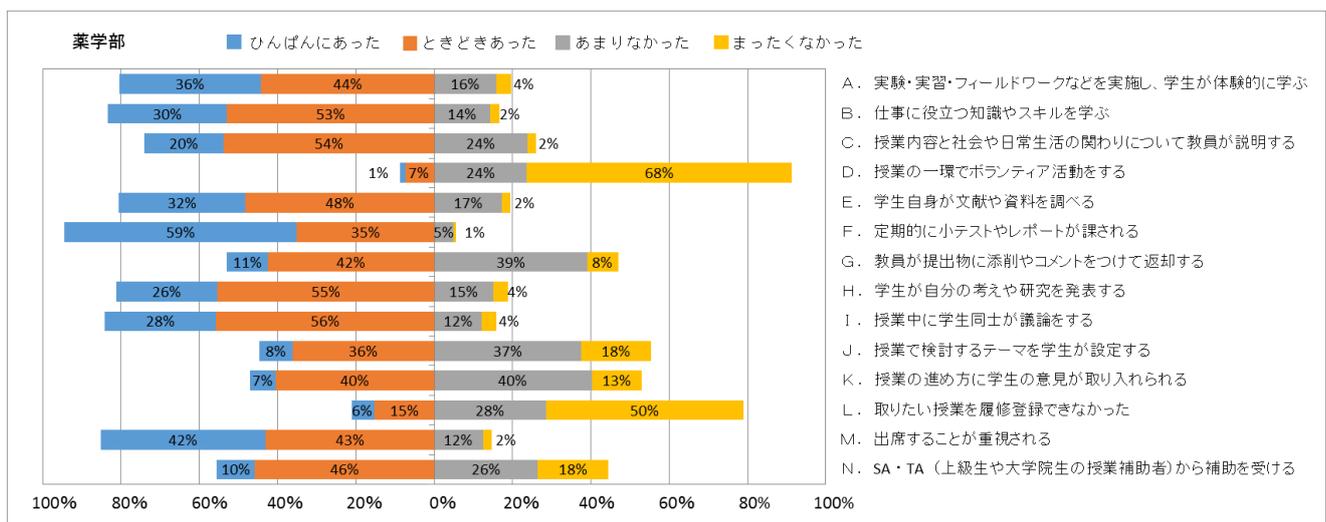
教養学部



人文学部



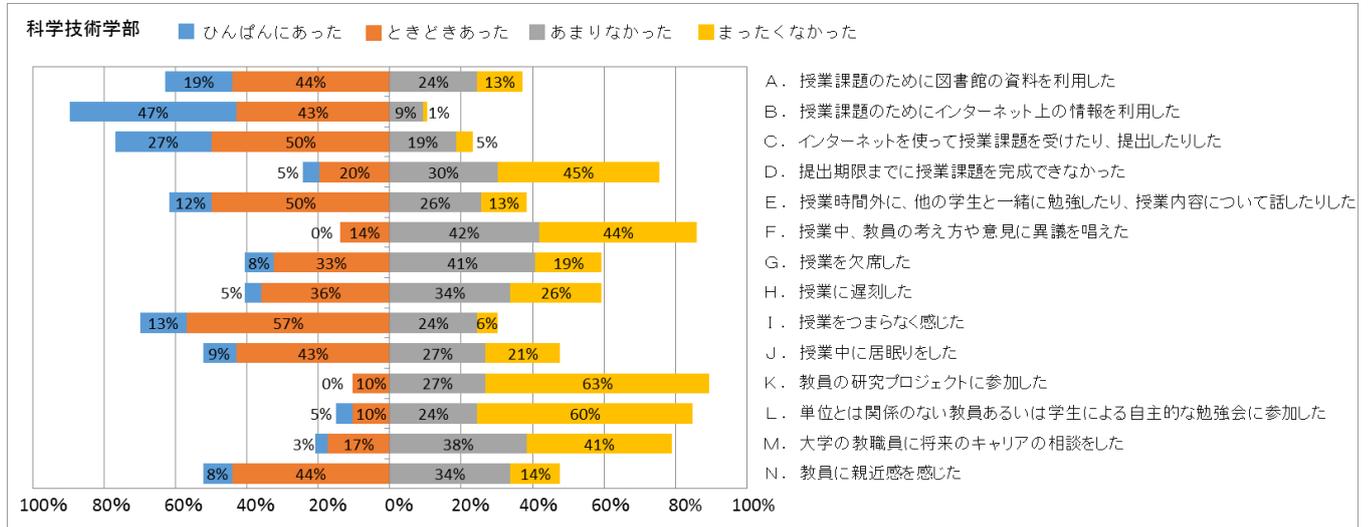
薬学部



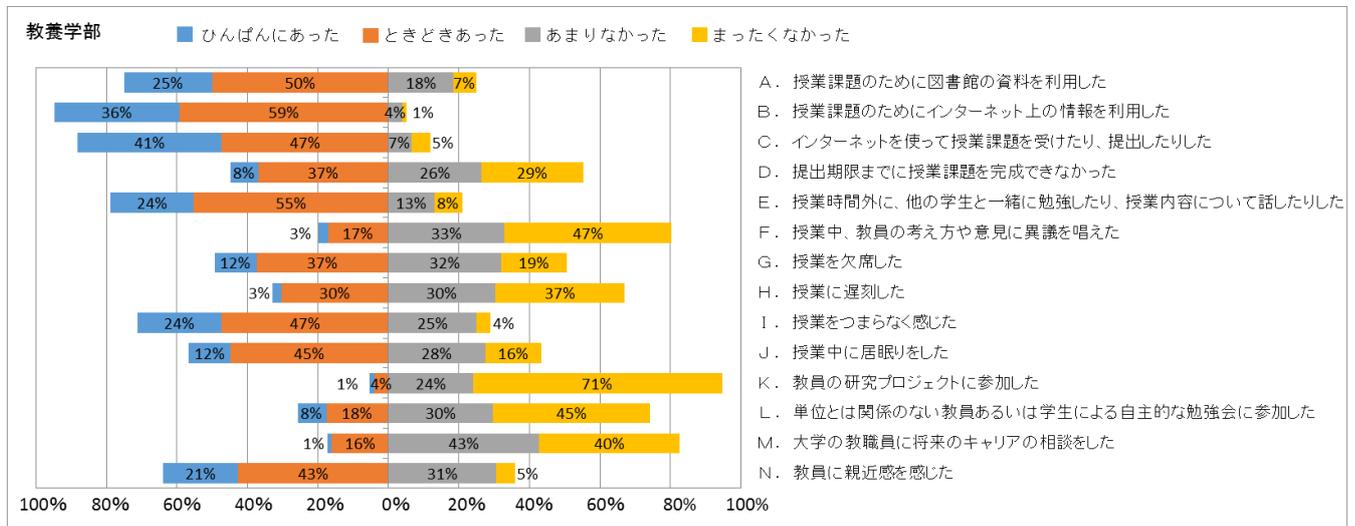
5.2.2 授業内外における学修行動

・大学の授業や授業以外の学習に関して、あなたは次のようなことをどのくらいしましたか。

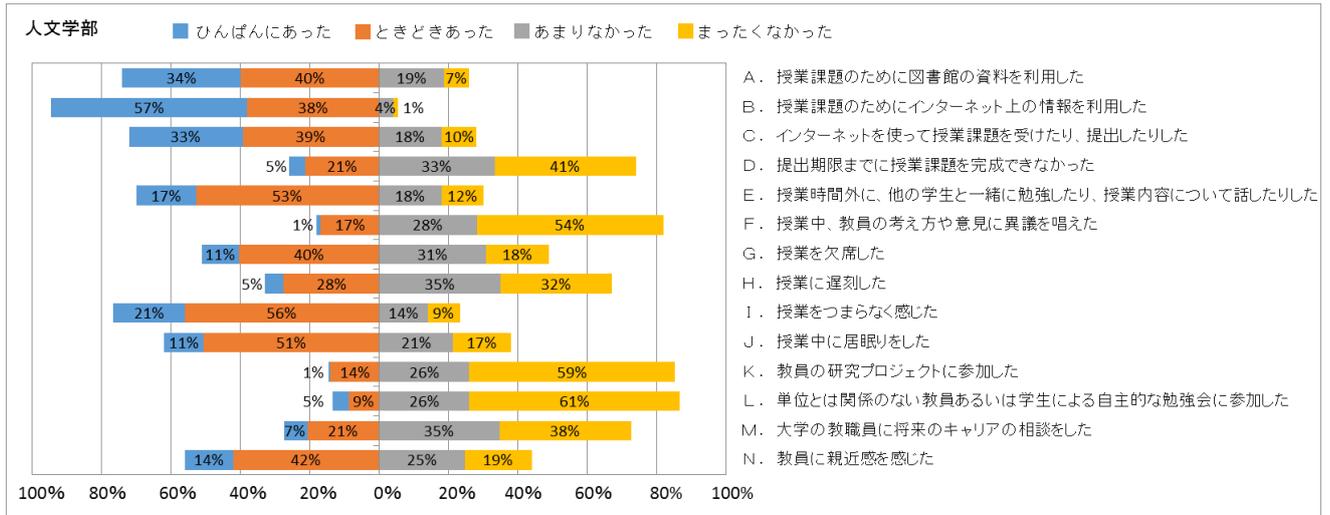
科学技術学部



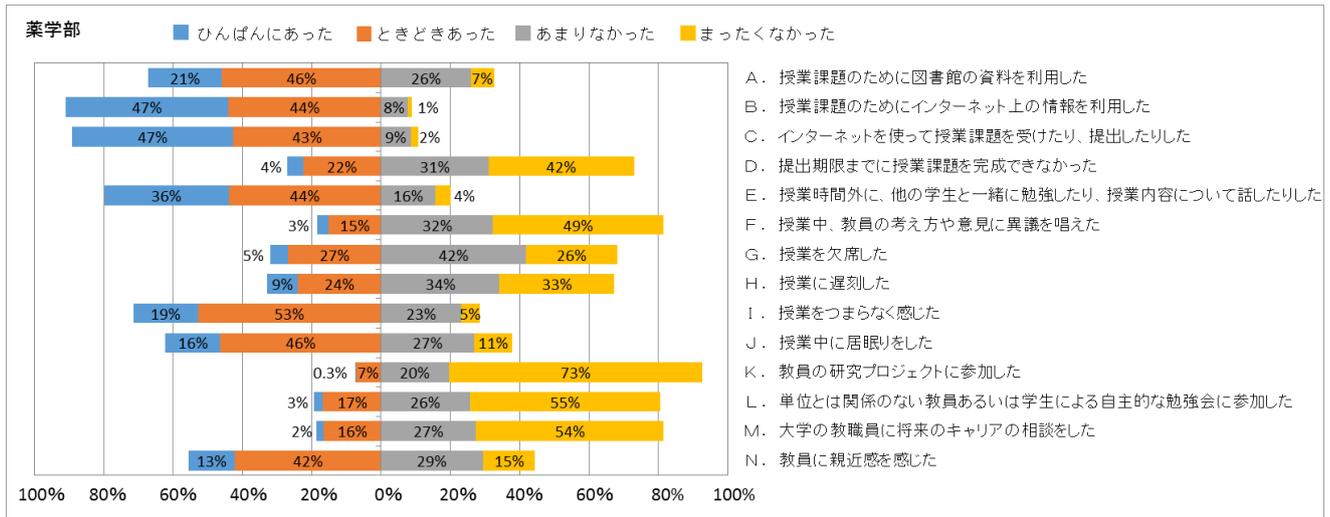
教養学部



人文学部



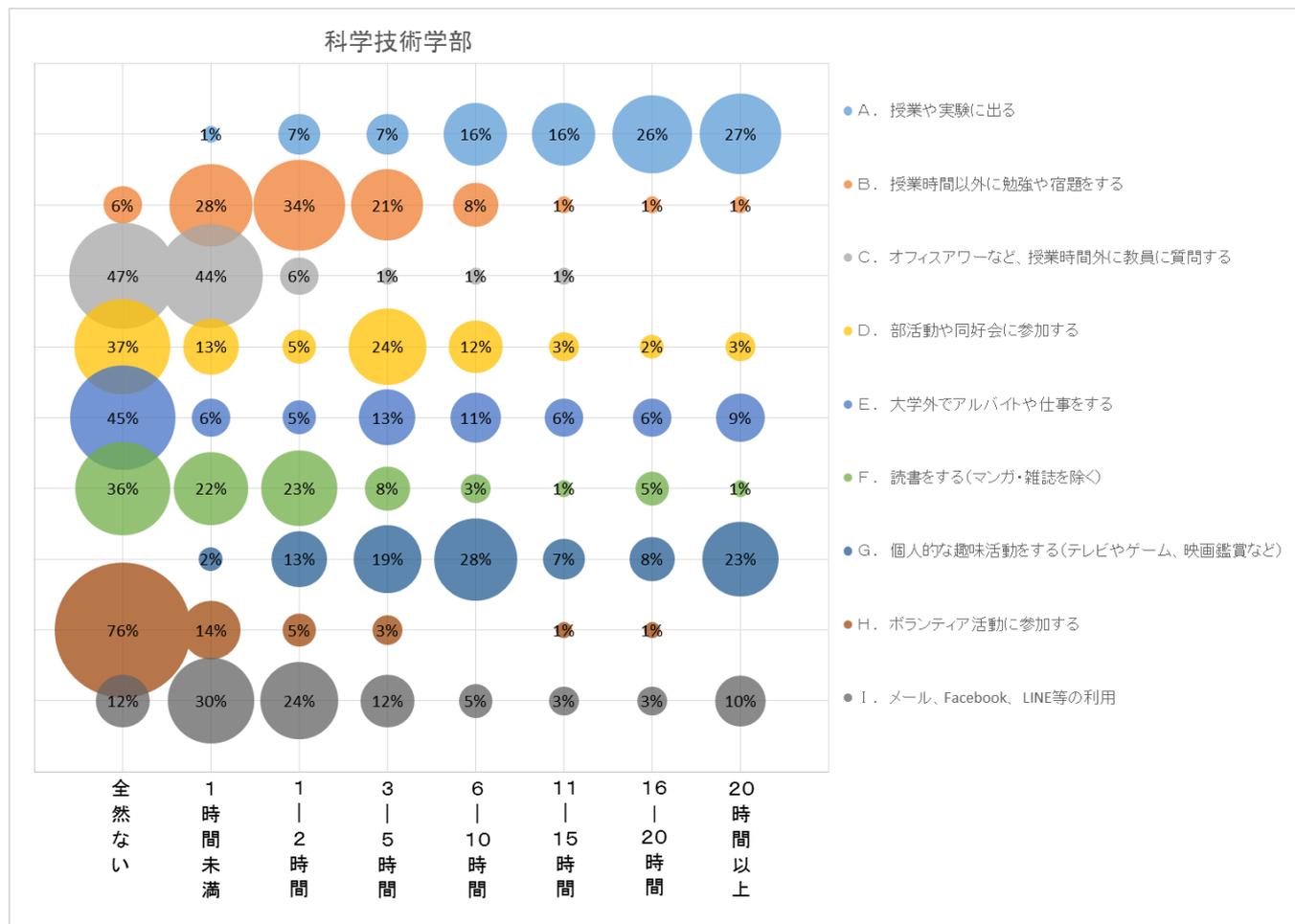
薬学部



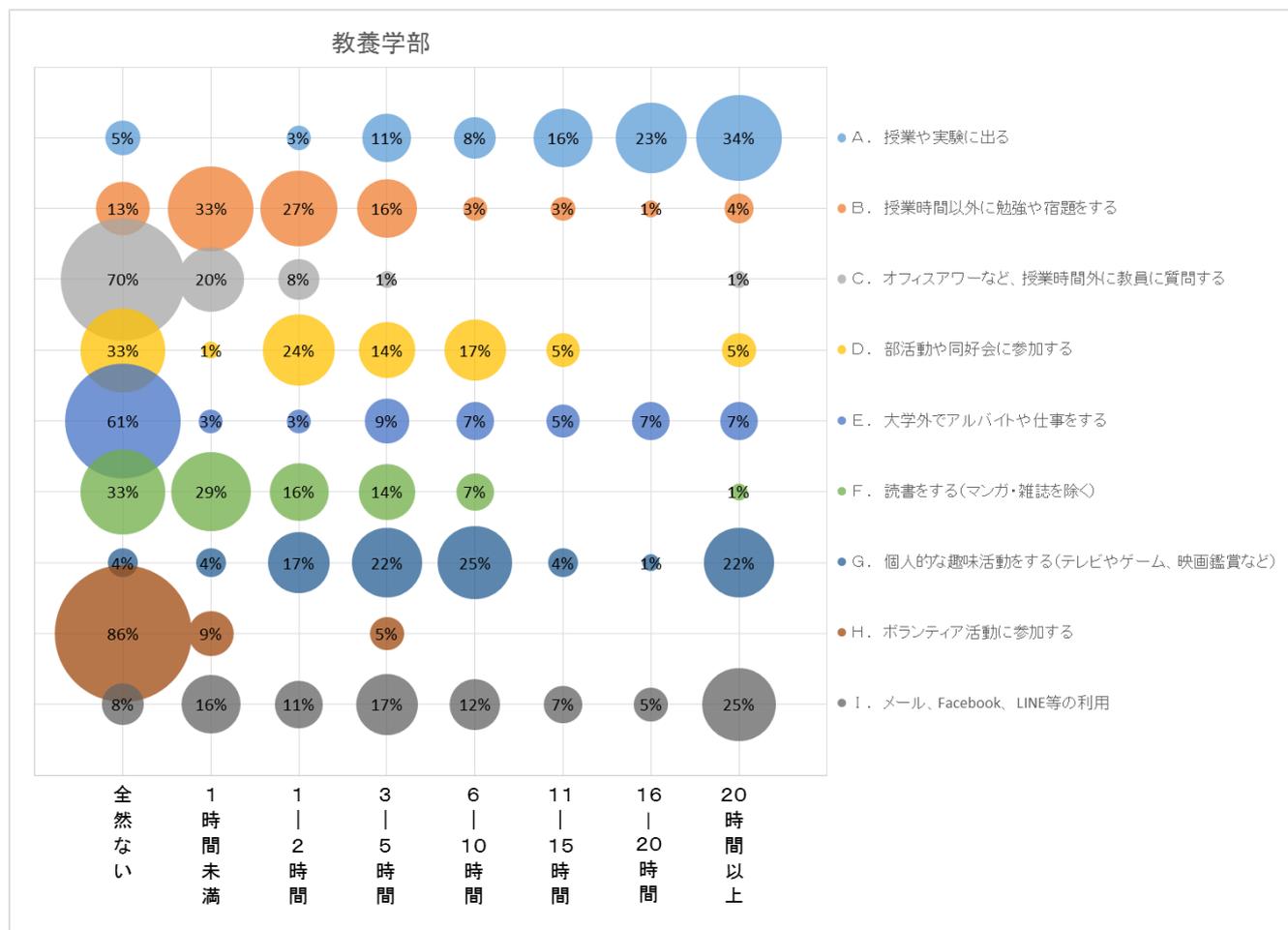
5.2.3 正課内活動や正課外活動に費やす時間

・入学以来、あなたは次の活動に1週間あたりどのくらいの時間を費やしましたか。

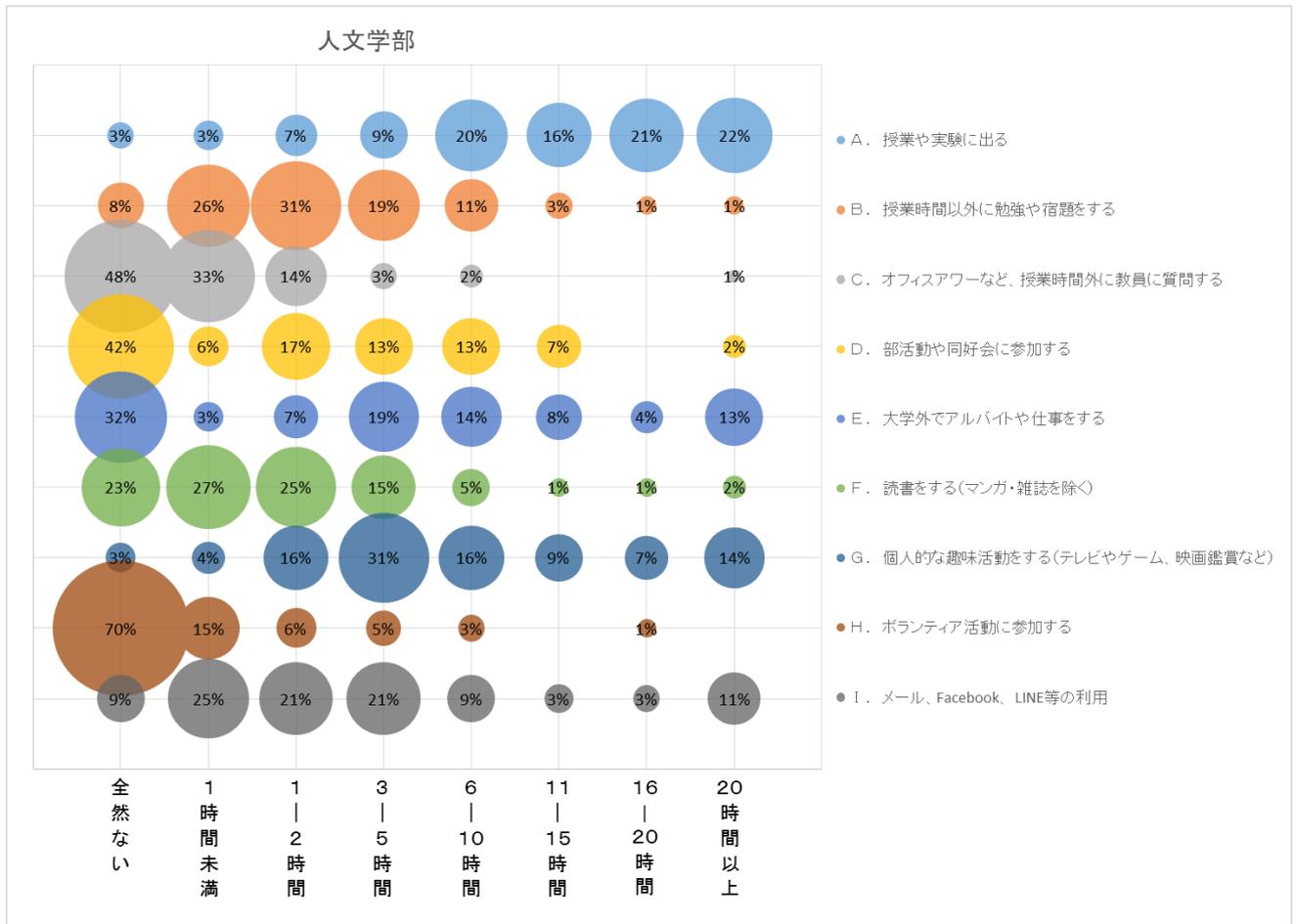
科学技術学部



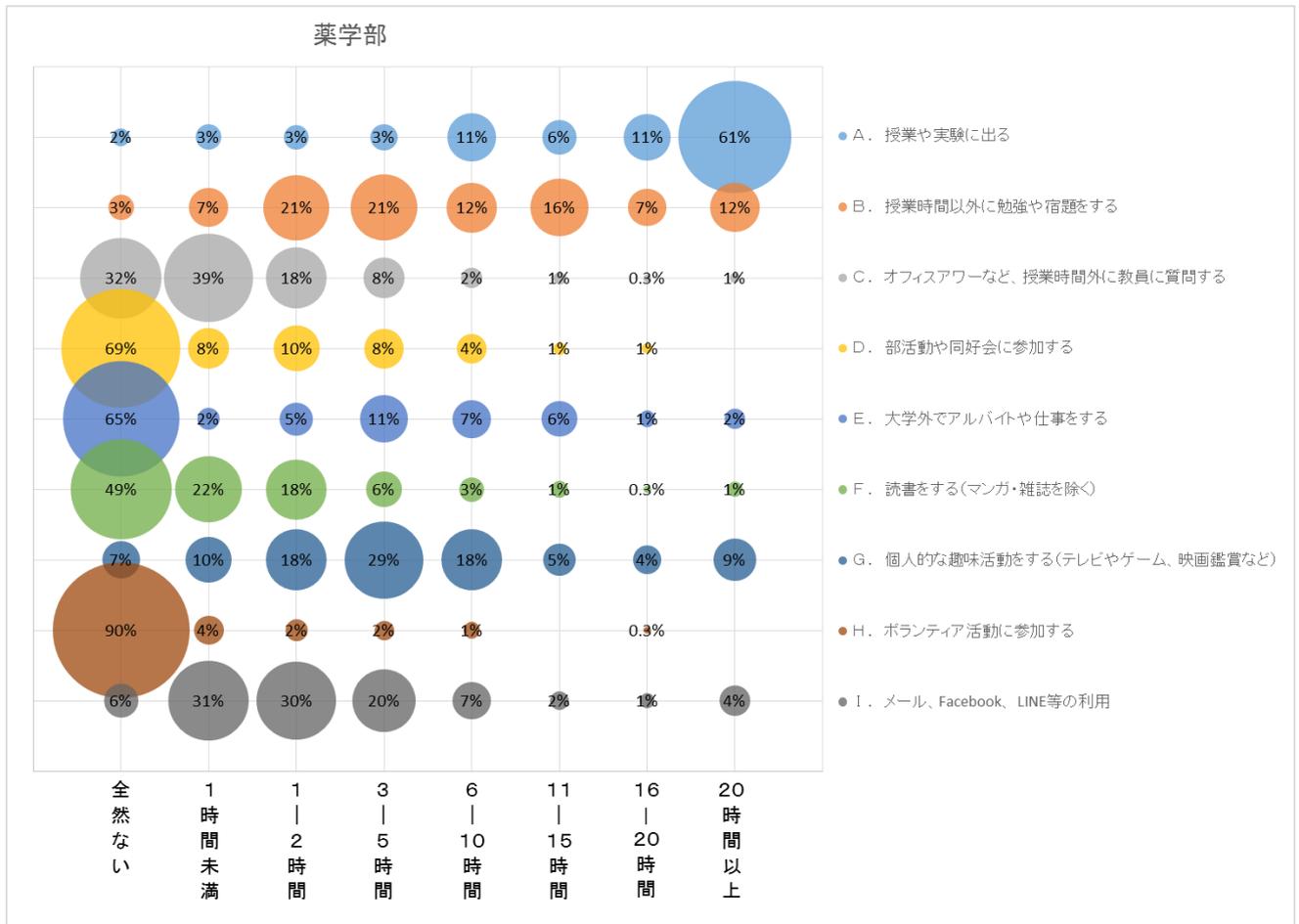
教養学部



人文学部



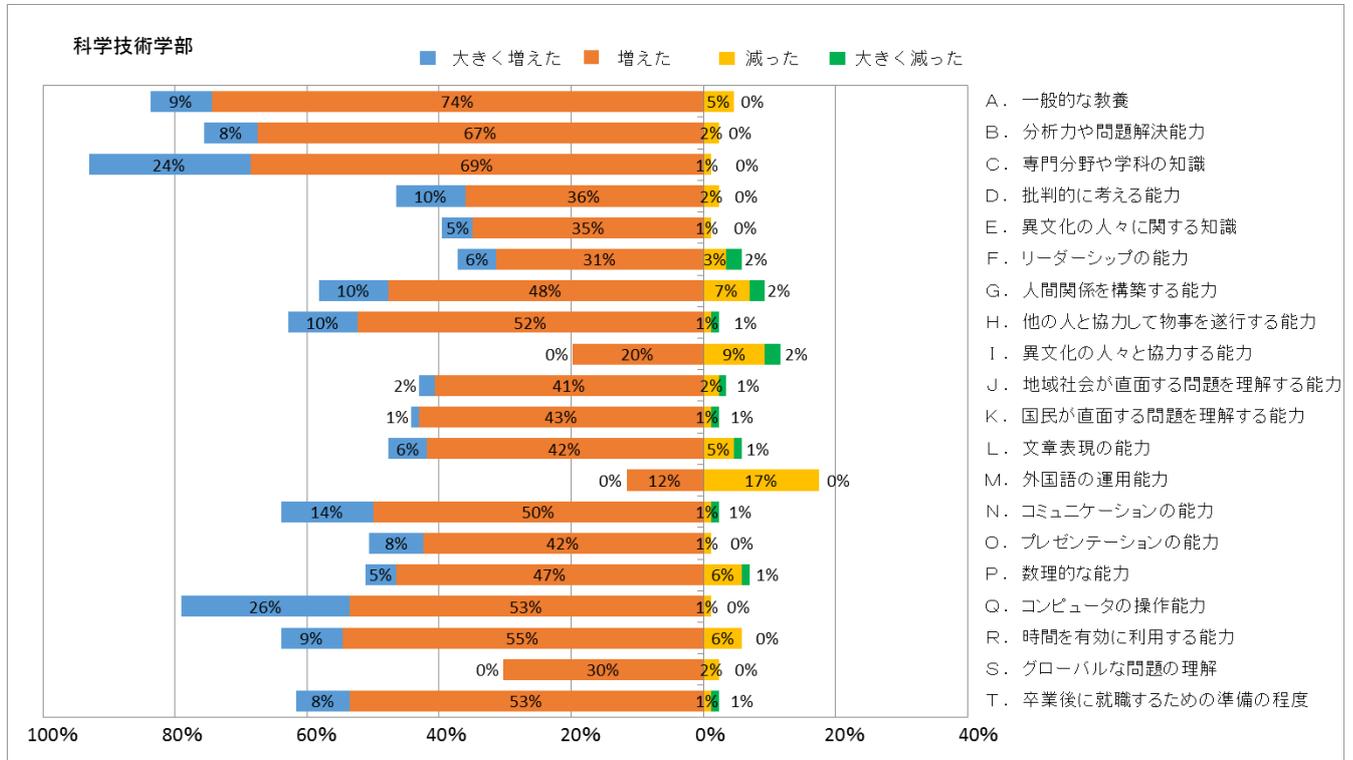
薬学部



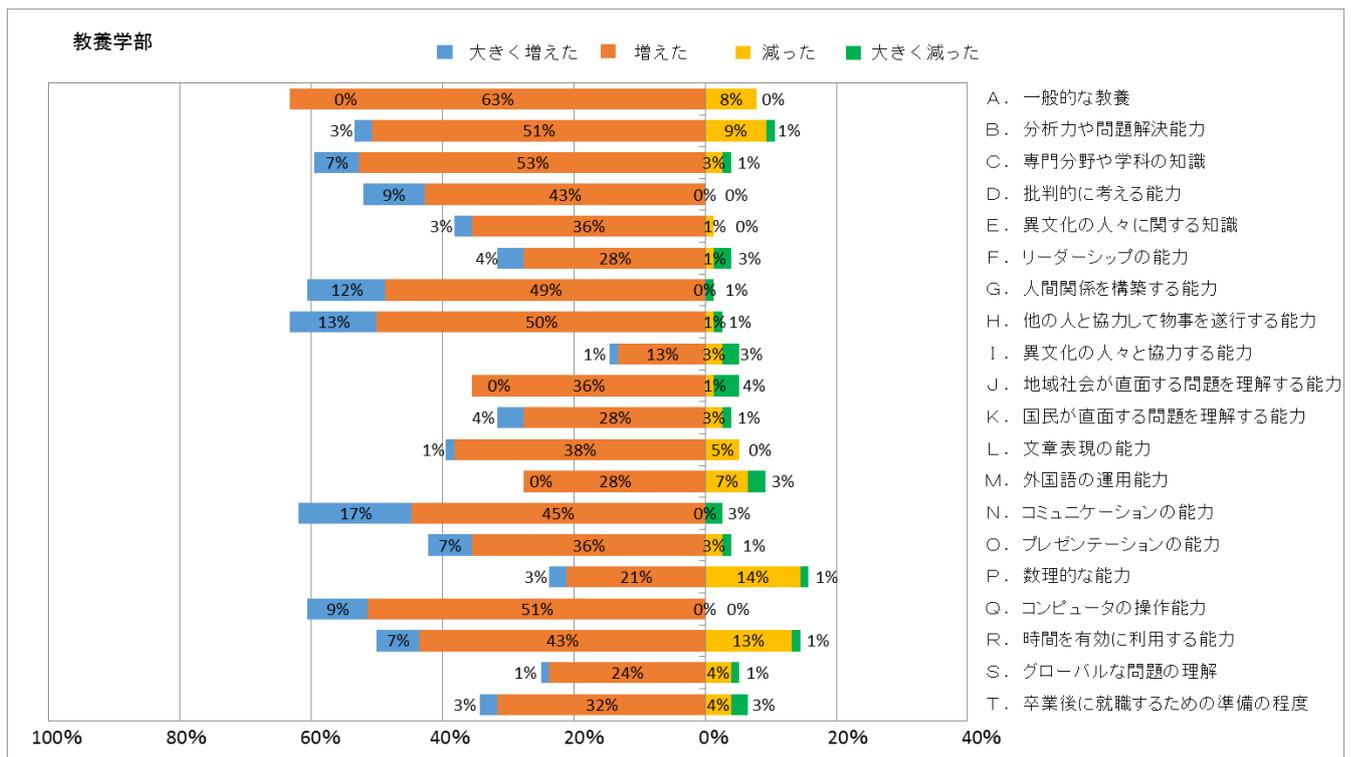
5.2.4 大学入学後の知識・能力の変化

・入学した時点と比べて、あなたの能力や知識はどのように変化しましたか。

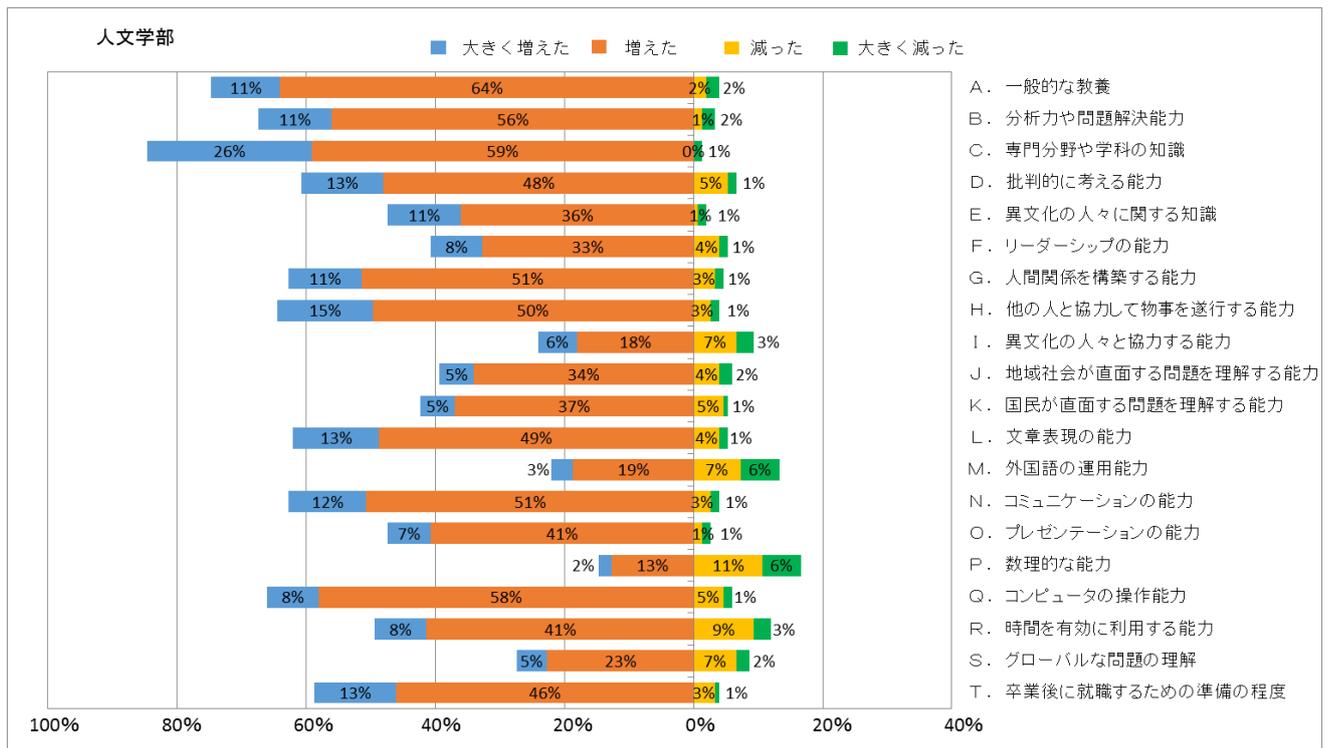
科学技術学部



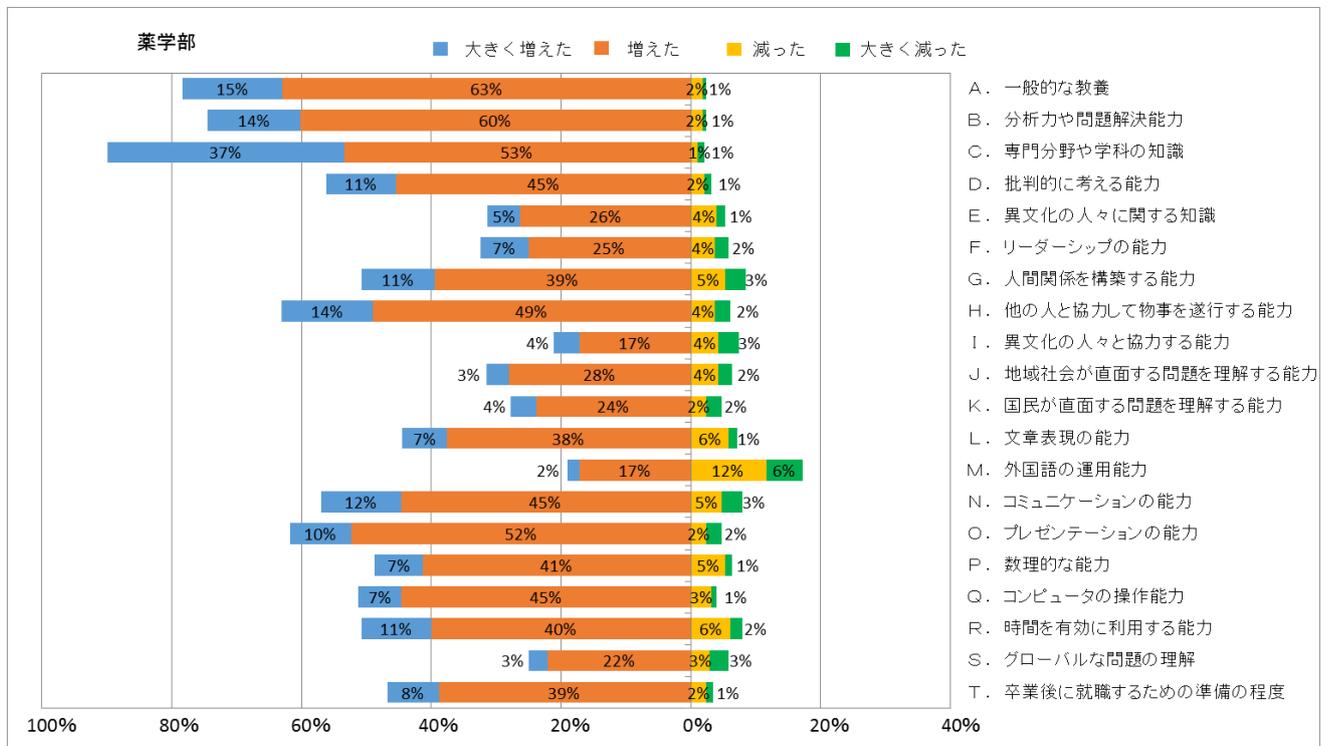
教養学部



人文学部



薬学部

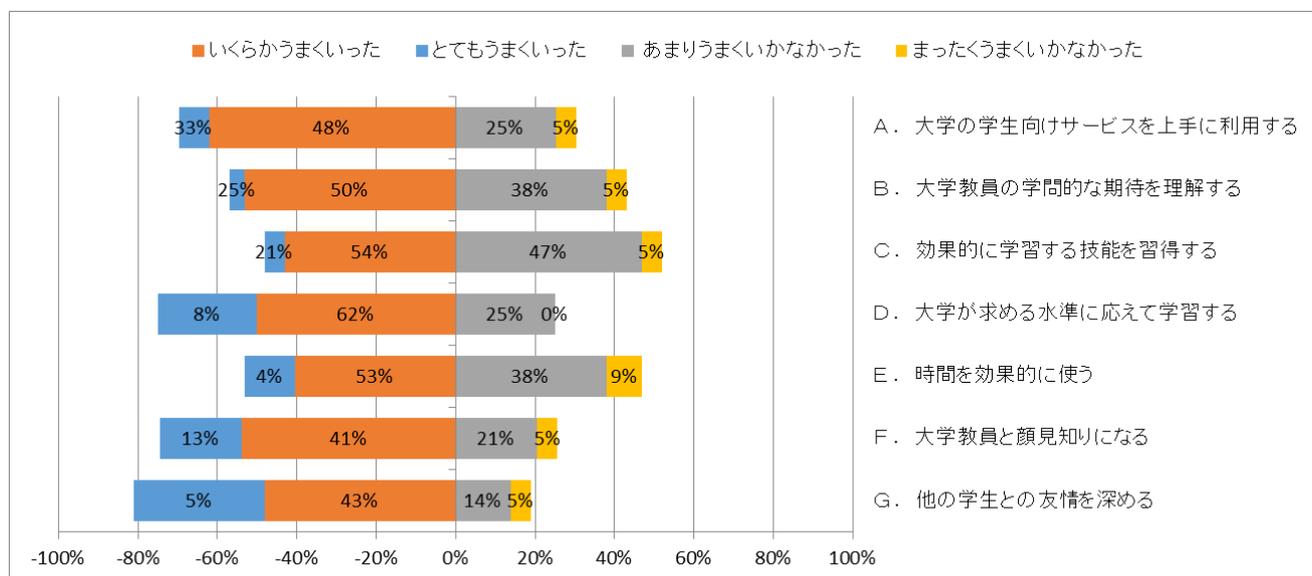


5.3 学びや大学生活に関する意識（学部別集計結果）

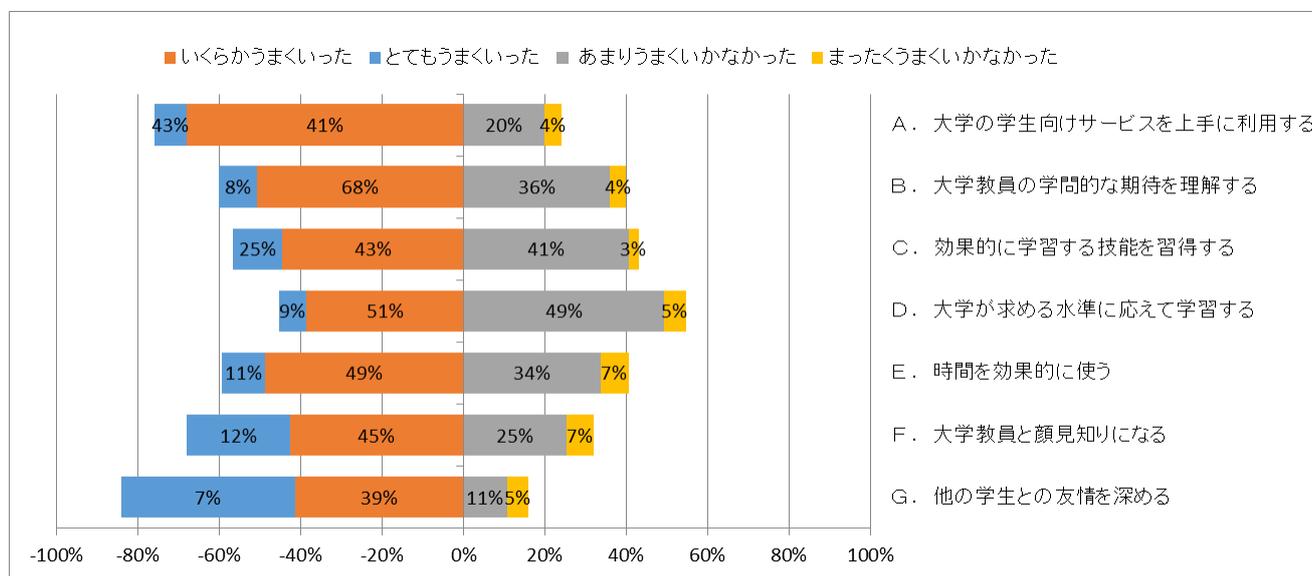
5.3.1 大学生活への適応感

・本学に入学してから、あなたは次のことについてどれくらいうまくいきましたか。

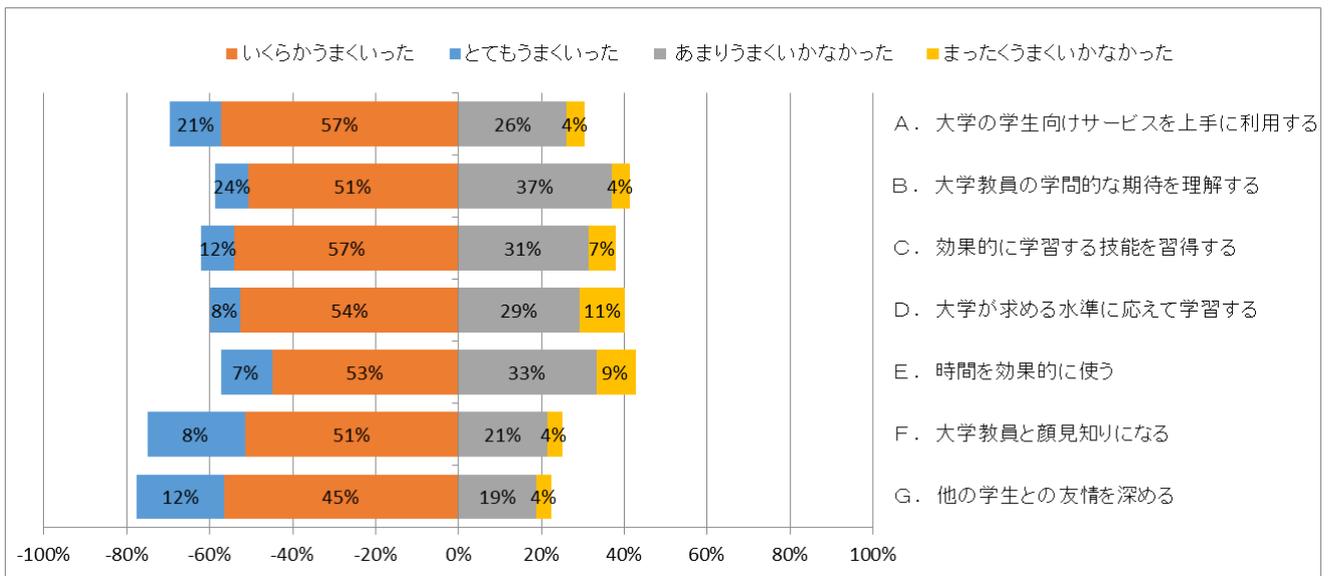
科学技術学部



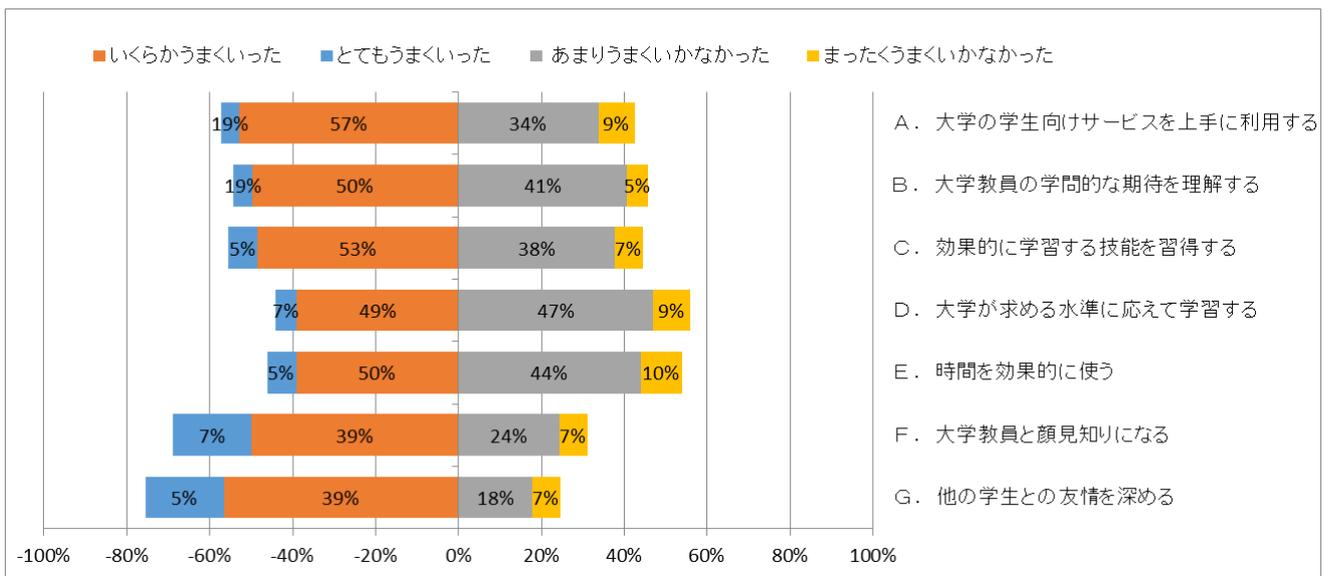
教養学部



人文学部



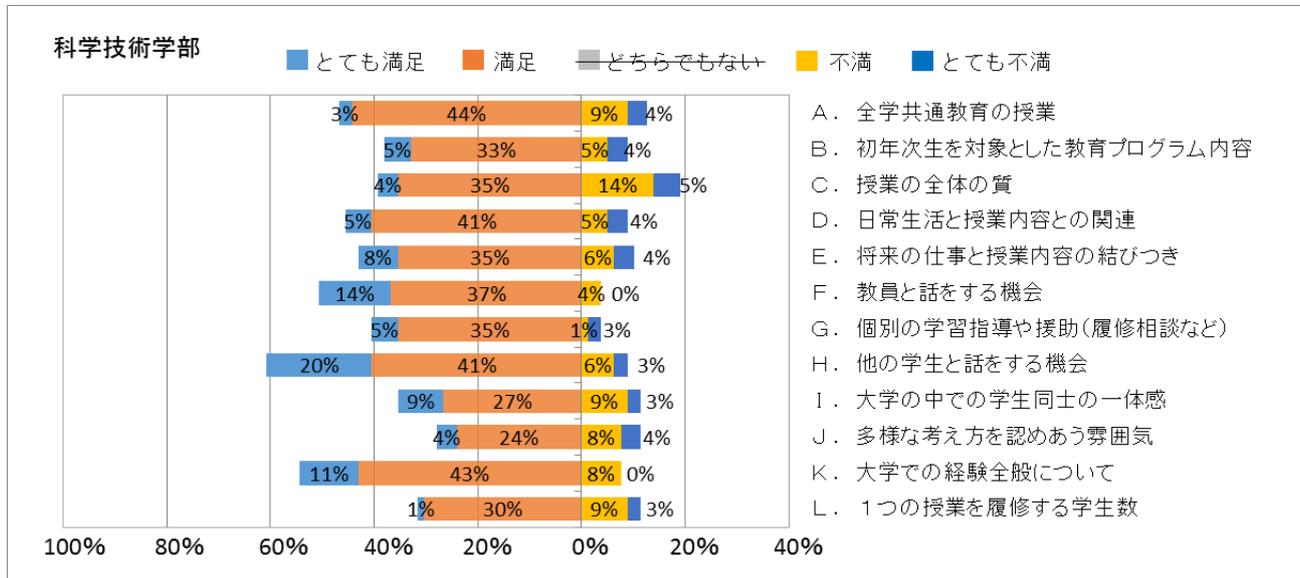
薬学部



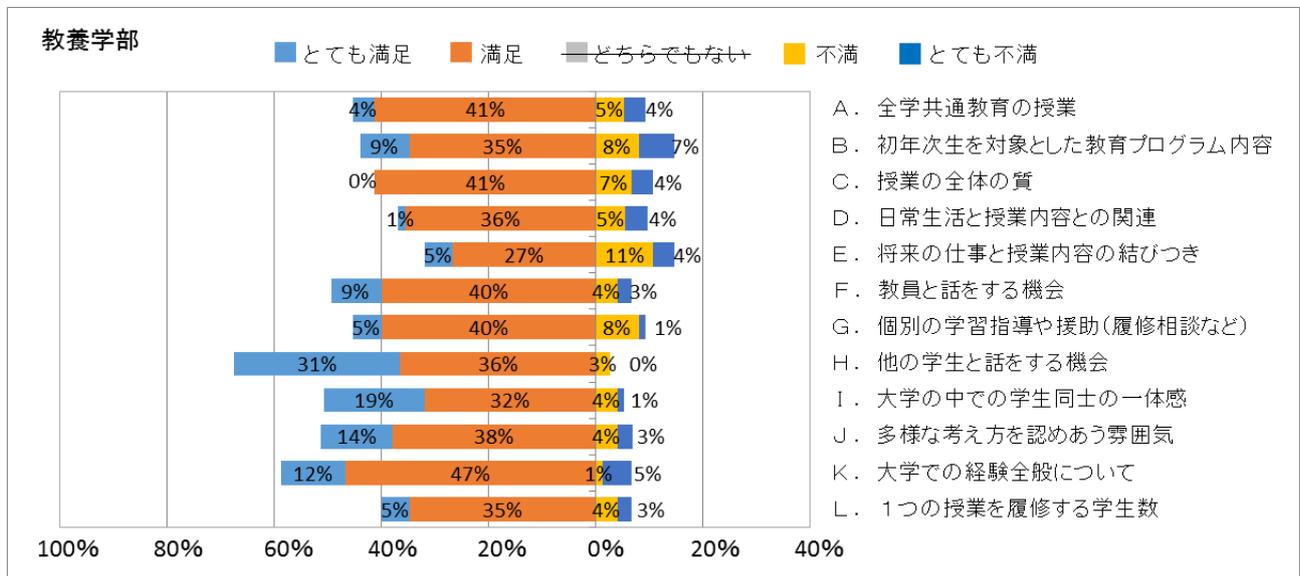
5.3.2 大学の教育内容に対する満足感

・あなたは、本学の教育内容にどれくらい満足していますか。

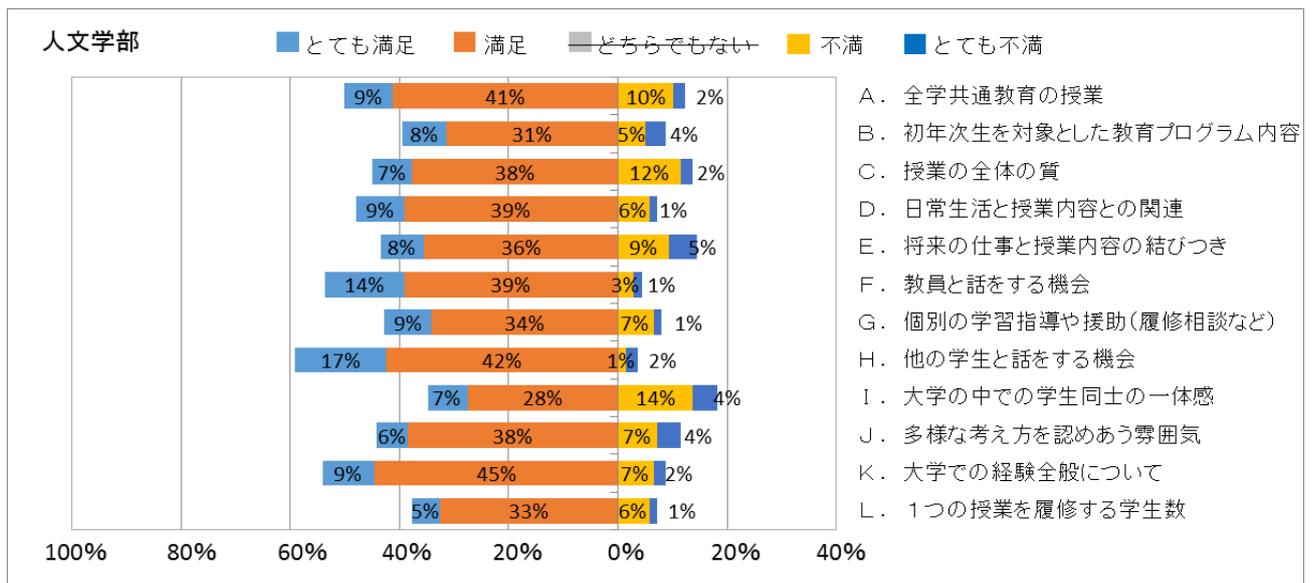
科学技術学部



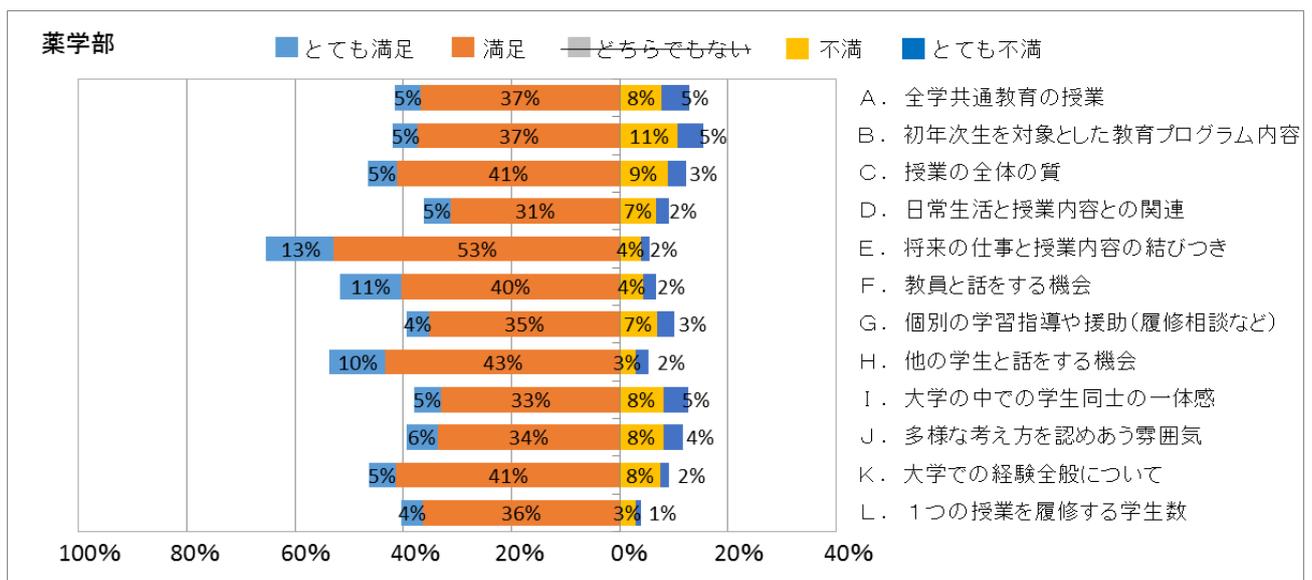
教養学部



人文学部



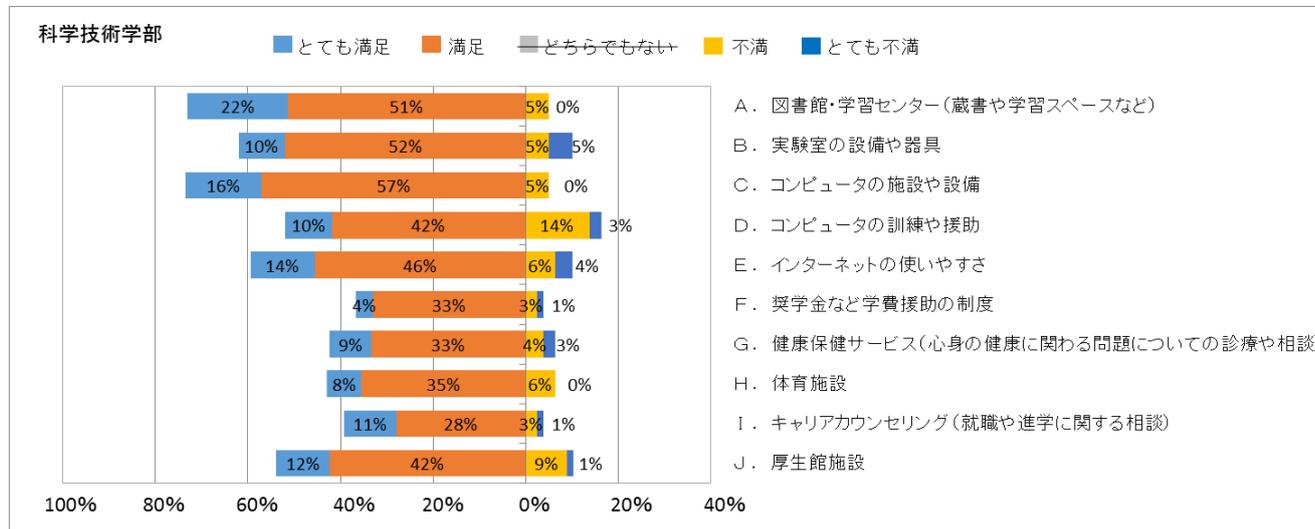
薬学部



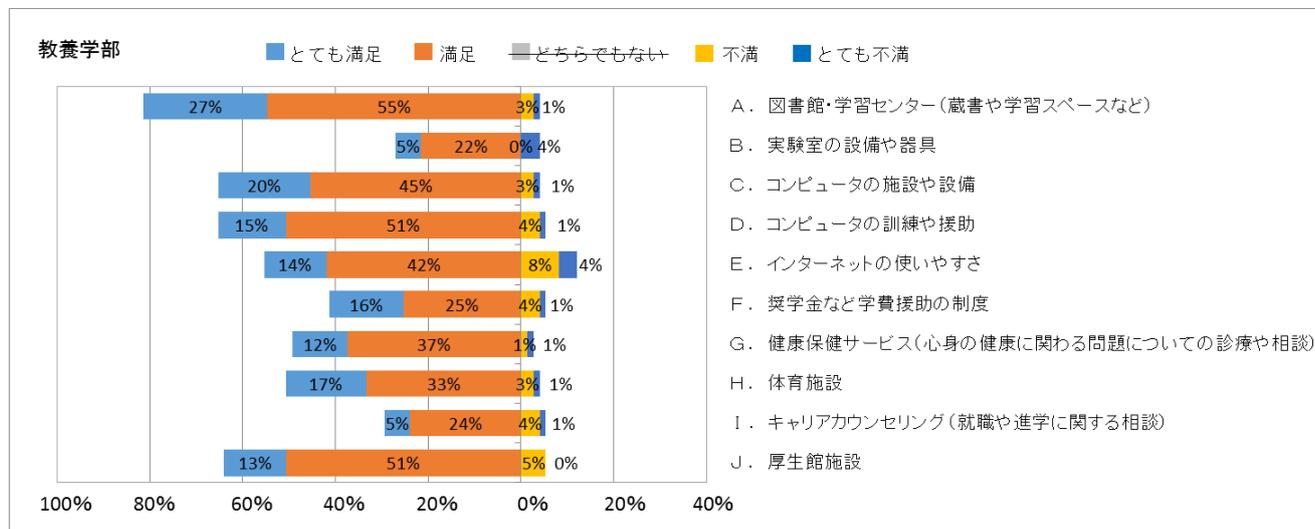
5.3.3 大学の教育環境に対する満足感

・あなたは、本学の施設や学生支援制度にどの程度満足していますか。

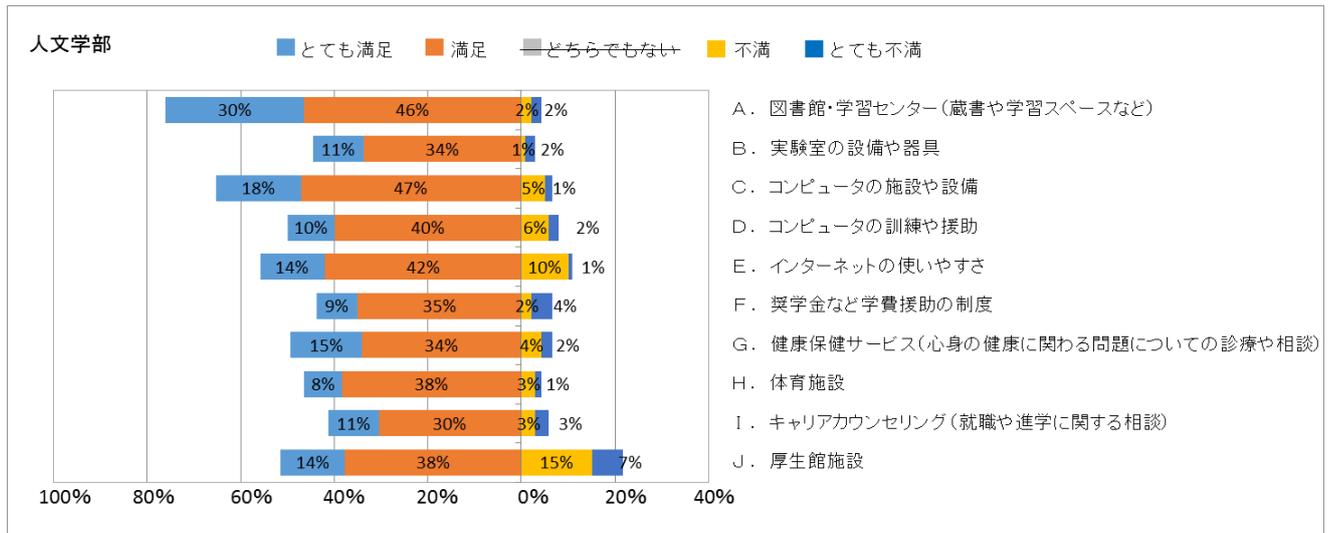
科学技術学部



教養学部



人文学部



薬学部

